



# 滋賀県諸藩における武芸教育に関する研究（その1）

## —— 膳所藩の武芸教育について ——

村山 勤 治（滋賀大学教育学部）

### 1. はじめに

近世をとおして近江国には18の藩が存在したが(明治3年新封の朝日山藩は除く)、そのなかで維新时期まで存続したものは、彦根藩(24万5千石)を筆頭に、膳所藩(6万石)、大溝藩(2万石)、水口藩(2万5千石)、三上藩(1万石、ただし明治3年廃藩)、仁正寺(西大路)藩(1万8千石)、山上藩(1万3千石)、宮川藩(1万3千石)の8藩である。本研究は、これら諸藩の武芸教育をできるかぎり明らかにすることを目的とするが、本稿では、このうちまず膳所藩における武芸教育をとりあげたい。

すでに膳所藩の武芸については、竹内将人著『膳所藩の武道』<sup>17)</sup>にその多くが明らかにされているが、本稿の目的とするところは、これら先行研究の成果に負いつつ、全国的な武道研究成果や未刊の武道資料等を加えて、膳所藩の武芸および武芸教育の全国的視点からの位置づけ、特色について述べてみたいと考えるものである。ただし、筆者の力量の限界もあり、対象とする時期は膳所藩において藩校遵義堂が設立された文化年間頃以降、すなわち、江戸時代後期の武芸、とりわけ剣術を中心にして述べることにとどまることをここでお断りしたい。

### 2. 膳所藩の武芸およびその教育

#### (1) 膳所藩における伝統的武芸観

関ヶ原の役のあと、膳所の地は、慶長6年(1601)より戸田氏を、元和3年(1617)には本多氏を、元和7年(1621)に菅沼氏、寛永11年(1634)に石川氏、そして慶安4年(1651)以降版籍奉還に至るまで本多氏を城主とした。これらは徳川譜代の臣の中でもいずれも戦において軍功のある家ばかりであった<sup>18)</sup>。京都への

入口に配し、交通の要所である膳所の地は、また戦となれば西国諸藩に対する備えの先陣的な要となるところであり、そこには軍功のある家、すなわち武にすぐれた家臣団をもつ大名を配することが必要であった。これから膳所藩の武芸つまり本多家家臣団の武芸教育について考えようとするにあたって、本多家は武勇でならした三河武士の伝統をひくものであることを押さえておく必要がある。

本多氏は慶応4年における俊次の入封ののち、  
やすまさ やすよし やすのぶ やすとし やすとし やすたけ やすまさ  
康将・康慶・康命・康敏・康敏・康恒・康政・  
やすとも やすまさ やすさだ やすただ やすあき やすしげ  
康伴・康匡・康完・康禎・康融・康禊と13代にわたって明治維新をむかえるが、康完の代(元明元年：1781～文化元年：1804)に「御為筋一件」といわれる内紛をおこしている。これは延享年間(1744～47)以来の本多家家老の悪政による財政破綻に端を発するものであり、農民一揆や藩士グループの対立など藩政が乱れ、藩士全体の志気のおとろえること享和年間(1801～03)まで続き、幕府の介入をうけた。しかしこの拾収を契機に文化期(1804～17)の初めより藩政改革が進められ、同時に、藩における文武教育のシステムが急速に整えられていくことになったのである。

古いところの膳所藩の文教育については不明であるが、寛政期(1789～1800)のころ、藩主本多康完は京都の儒者皆川淇園きえんの学に興味をもち、淇園門下に教えをうけた。そして、文化年間に入り藩校遵義堂設立後は淇園門下が教授となり、この皆川の学風が膳所藩文教育の柱となった。

皆川淇園の系統の学風は、荻生徂来の古文辞学的な方法を柱としながらも、それにとらわれずに諸説をとり入れていこうとする折衷学派的

なものであったとされている<sup>8)</sup>。この皆川学が武芸に対し、いかなる考えを持っていたかについて詳しく知ることはできないが、ここに皆川淇園の『淇園答要抄録<sup>9)</sup>』にある「武の事」の一節を引用しておきたい。

「武といふは敵に身を以て相当りてこれを禦ぐの徳を武といふ。悪敷ものに出合ても其気の逃る事なくして夫を禦ぎ留る遅しき心だてを弓劍刀鎗の藝にてそれを持出す故に武藝ともいふなるべし、されども古への大夫は文をも武をも能鍛練して治平には民を治める事には其軍に将たる人多し。後世にても晋の羊祐は軍に臨むに甲冑を着し候事なくして疆呉を押へたり、三国の諸葛亮も弓劍刀鎗の稽古をしたる事は未だ承り及ばざれども、天下三分の其業を創めて八陣を布て魏の名将の司馬懿を屈せり。士大夫の武徳をなし事業に施す所は是又文徳によりて謀略を定め謀略によりて勇決を出す事にて必ず武藝の稽古には寄べからず。何れにも壮によりて勉強するに習はざれば武徳も成就し難かるべしと存候事に御座候。」

江戸時代中期における武芸は、一般的には武士の修養のための手段とされ、武芸の修練を通して心の修練をすることが強調された。淇園においては、武芸はあくまでも戦闘のための実用的技法を修練するものであるというとらえかたがなされている点が注目されよう。

## (2) 膳所藩で行われた武芸流派

膳所藩において行われた武芸について知るてがかりとなる資料は、『懐郷坐談<sup>9)</sup>』に載る「武術師範役姓名」である。これには「但し、旧藩に於て武術の師範役となりし順序に依り掲けたるものなれば流派相伝の系統を異にするものあり」と付記され、以下のような師範名が記されている。

### ○劍術

#### 直心影流

広田翁右衛門——高橋權太兵衛——岡田東太郎——田中準之輔  
(定府) 小野源太次郎——浅山諫

#### 今枝流

加藤三右衛門——浜専右衛門——西川紋太郎

#### 天心独名流

宇野先右衛門——佐曾羅庄兵衛——川村左五助

#### 成孝流

杉浦喜十郎——森傳太夫

#### ○檜術

#### 種田流 (素槍)

鈴木為次——中野章助——小野周八郎

#### 宝蔵院流 (十字槍)

高橋彌八——梅垣多四郎——片岡弾次 (高田派) ——吉田萬五郎 (後に五郎左衛門と改名)

#### ○柔術

#### 関口流

神谷玉城——猪狩衛盛

#### 自現流

久野三郎兵衛——成尾甚之丞

#### 真妙流

宇野先右衛門——佐曾羅庄兵衛——川村左五郎

#### ○馬術

#### 大坪本流

田先小一右衛門——喜多善司——鈴木元左衛門

(定府) 馬場大五郎

#### ○弓術

#### 日置流竹林派

上阪三郎右衛門——山田善太夫——上阪光太郎 (後に三郎左衛門と改名)

#### 伴道雪派

松原熊蔵——松原六太夫

#### ○砲術

#### 荻野流

田河作左衛門

#### 高島流

平元肇——中神右橋  
(定府) 高見昌三郎

#### 天山流

- 森喜右衛門
- 三島流
  - 寺本小彌太——澤許見（森重流兼学）
- 中和流
  - 富増新兵衛（岩戸流兼学）——高島運八郎
- 軍具
- 大江流
  - 村松猪右衛門静脩——松瀬九八郎
- 甲冑着用
- 真野流
  - 山川十内
- 軍事役
- 越後流
  - 戸田半太夫——広田權之助  
（定付）權太尉兵衛
- 甲州流
  - 猪狩衛盛
- 長沼流
  - 森喜右衛門

以上に述べられる師範名は幕末のものである

とみられるが、これらの多くはすでに前掲の『膳所藩の武道』に略伝等が明らかにされており、ここでは省略したい。ただ附記にもあるように流派の伝系等に不明なところがあるので、以下、特に剣術を中心にその伝系について述べておきたい。

まず今枝流であるが、今枝とは、寛永年間（1624～44）に丹後宮津京極家に任せ、一傳流の居合を学んで奥儀を究めた今枝彌右衛門良重とその子四郎右衛門良政を祖とする一流派である。四郎右衛門良政は、寛文8年（1668）、京極氏が減知された時に浪人となり江戸に住んだが、その後膳所藩主本多康将に3百石をもって召し抱えられた。これ以来、膳所藩に今枝流が行われるようになったのである（『大日本剣道史<sup>4)</sup>』605頁）。この後、膳所藩には、今枝八左衛門良基——四郎左衛門良尚——同良正——同良温と今枝流が伝えられた。

今枝流が多くの諸藩に弘流するに至ったのは今枝佐仲良台（正保3年：1646～元禄15年：1702）の代からである。良政には伯耆の倉吉に

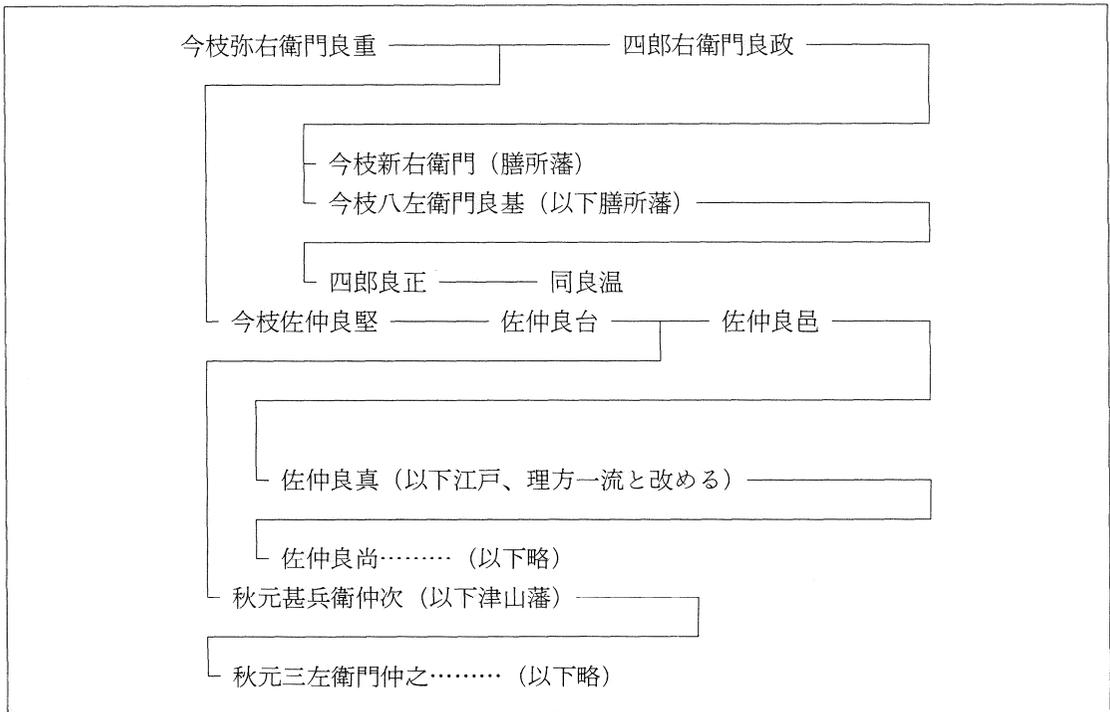


図1.〔膳所藩関係 今枝流系図〕

住む弟良堅があり、これの次男が良台である。『大日本剣道史<sup>4)</sup>』(472頁)には良台について「剣術其他の武術を修行して諸国を廻り江戸へ出て、摂津高槻の城主永井日向守直清に仕へたが、其後仕官の身では修行が十分出来ぬから辞して浪人になって修行し、当時江戸における浪人剣士としては三人の内であったといふ」と述べられているが、その江戸の道場は良台の次男良真が相続し、兄の良邑は伊賀上野候に仕えたという。また良台の門人秋元甚兵衛仲次は津山藩へ仕え、秋元の系統は幕末にまで続いた。

今枝流の主な系統について『大日本剣道史』、『武芸流派大事典<sup>21)</sup>』を参照すれば、図1のとおりである。

直心影流剣術は、幕末に至って、諸藩において最も弘流した流派である<sup>2)</sup>。正徳年間(1711～16)に直心影2代目の長沼四郎左衛門国郷がいちはやく先駆的な竹刀剣術を採用したことによって勢力を伸長し、その後、長沼の正統を受け継ぐ藤川弥司郎近義の系統、さらに文政期以降には男谷精一郎信友の男谷派も加わって、非常な広がりをもせた流派である。そして、膳所藩にはまず長沼系の直心影が入った。その師範が広田亀助光章(翁右衛門)である。つぎに入ったのが男谷派であった。弘化5年(1848)に西尾藩の田代辰益によって編集された『諸国剣家姓名録<sup>2)</sup>』の中に膳所藩として「直心影男谷門下高橋権太兵衛、直心影流男谷門下岡田藤太郎」の名があげられているが、これは前掲の「武術師範役姓名」と一致している。

長沼系と男谷派のちがいは、前者が形稽古を主として、試合の際には3尺3寸前後の短竹刀を使用して上段構えで行うのに対して、後者は、試合稽古を主とし、3尺8寸ほどの長竹刀を使用して中段構えで稽古・試合を行うものである。後者の方が試合には有利であり、幕末には全国的にも男谷派が急速に勢力を伸長し、諸藩において、同じ直心影流であっても、男谷派が長沼系にとってかわることもあった。後述することになるが、膳所藩においてもこれは同様であったようである。『長沼家系図<sup>20)</sup>』・『膳所藩の武道』

に載る広田亀助の「直心影流兵法究理巻」等を参考にして系図を書けば、図2のとおりである。

膳所藩における他の武芸流派についてわかるところは少ないが、『武芸流派大事典』に載る膳所藩関係武芸系図を拾い出せば、図3から図10のとおりである。

最後の系図にある真野流を含めて、剣術の天心独明流と成孝流、柔術の自現流と真妙流、砲術の天山流・三島流・中和流などの武芸流派は、いずれも極小の流派であり、おおよそ一流一藩的(その藩だけにあった他藩にはみられない)<sup>3)</sup>な流派であろうことが推測される。これら以外の槍術の種田流・宝蔵院流、柔術の関口流、馬術の大坪本流、弓術の日置流竹林派・伴道雪派、砲術の荻野流・高島流といった流派は、周知のように全国諸藩に弘流した大流派である。

### (3) 遵義堂の武芸教育

『旧膳所藩の学制一班<sup>10)</sup>』によれば、遵義堂の創設は文化期の初めごろであるとされている。その校舎については、創設後の建物略図を参考として、以下のように記されている。

「遵義堂の校舎は膳所家中町俚俗に馬乗馬場と称する所にあつた。その建物は唐制に模して、設計されたものである。表門を入ると芝生があつた。(中略)この芝生を隔てて表門と相對して立的て居つた大きな建物が御堂即ち遵義堂であつた。芝生の左方に武芸の稽古場が二棟並んで立つて居た。右方には弓矢場があり、その弓矢場を経て奥まつた所に手習所があつた。手習所は御堂に向つて右に位置し、廊下伝ひに御堂と往来が出来るようになっていた。」

ここにあるように遵義堂には文化期における設立当初より武芸稽古場が併設され、剣・槍・弓術等の師家道場が学校に編入せられた。また馬術についても桜馬場が設けられた。

維新时期前後の遵義堂における武芸に関する教科・試験・職名等について略記すれば以下のとおりである。

〔教科〕剣術・槍術・柔術・弓術・砲術・馬術・兵学(維新前に越後流から西洋

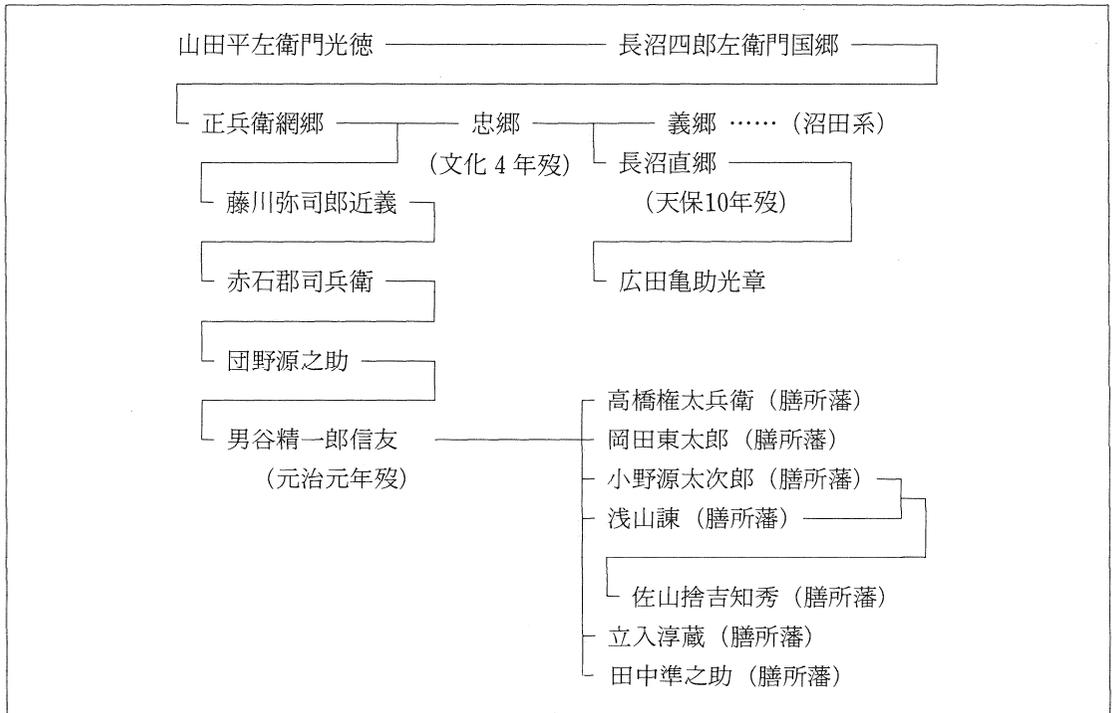


図 2.〔膳所藩関係直心影流系図〕

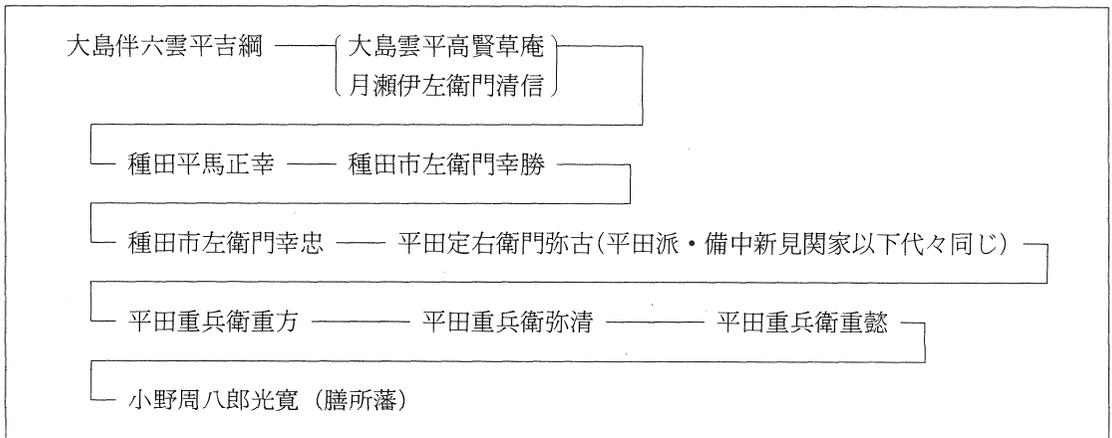


図 3.〔膳所藩関係種田流系図〕

流に改められた)等の武芸種目があり、このうち剣術・槍術は学校構内の稽古場において稽古が行われ、柔術・弓術は師範宅稽古場の両方で、砲術・馬術は主に師範宅稽古場で稽

古が行われた。

〔試験〕年1回、藩主前において武芸「御改」が行われた。

〔職名〕武芸には、各流派ごとに、師範学頭または取立役と世話人各1名、およ

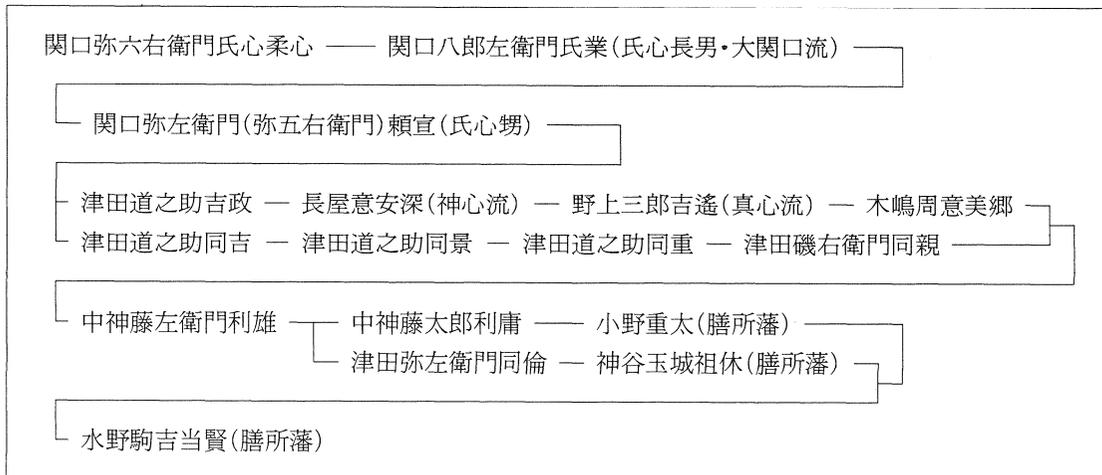


図 4. [膳所藩関係関口流系図]

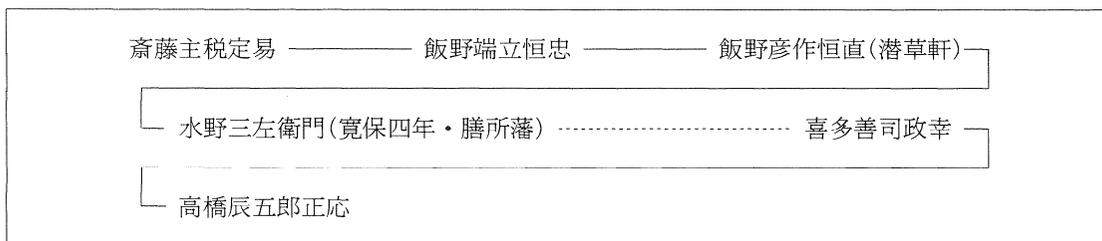


図 5. [膳所藩関係大坪本流系図]

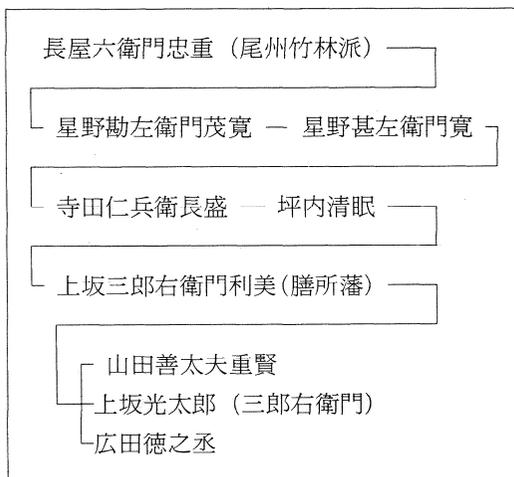


図 6. [膳所藩関係日置流竹林派系図]

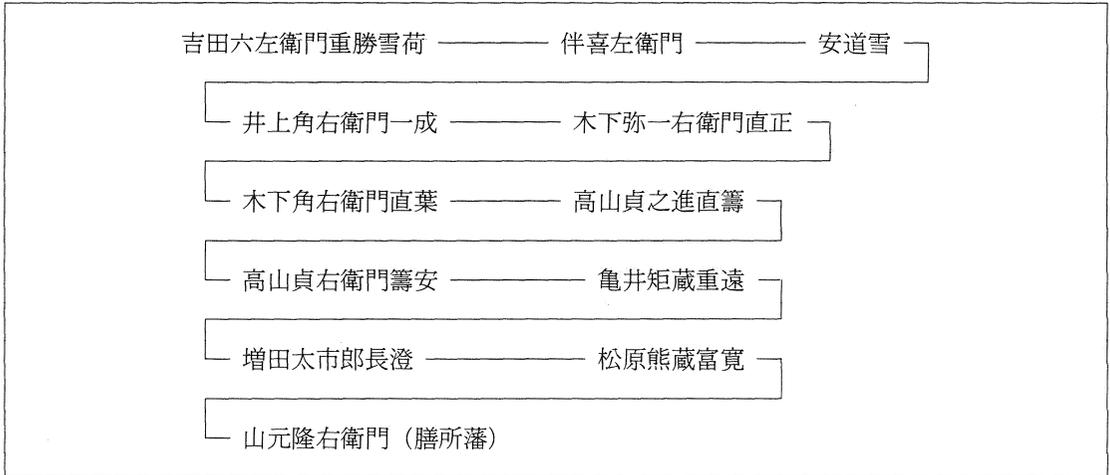


図 7. [膳所藩関係道雪派系図]

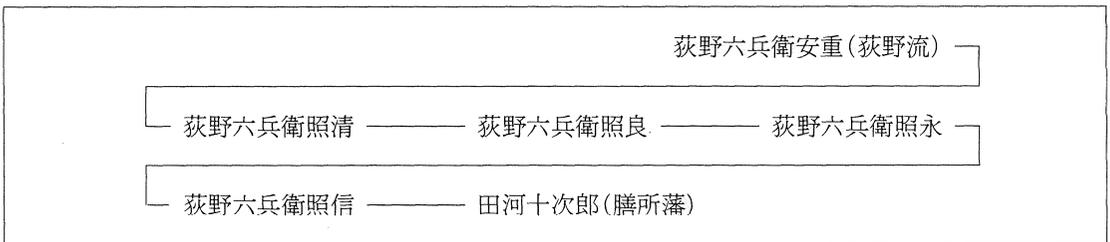


図 8. [膳所藩関係荻野流系図]

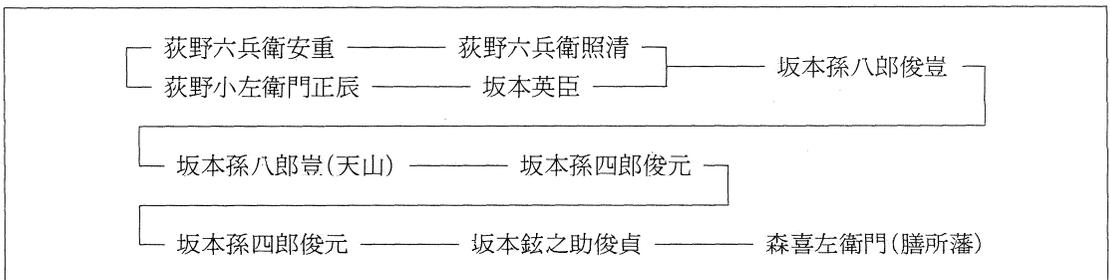


図 9. [膳所藩関係天山流系図]

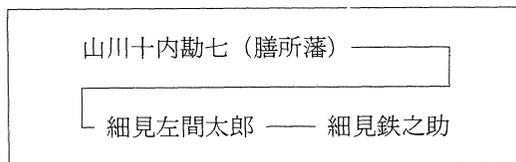


図10. [膳所藩関係真野流系図]

び世話人4～5名が置かれた。

ところで、遵義堂の武芸稽古場はいわゆる「演武場」的性格をもつものであった（資料1参照）。つまり遵義堂の武芸稽古場は、「いろいろな武技の、いろいろな流派に対する共同稽古所<sup>7)</sup>」であり、ある特定の流派の専用稽古場ではなかった。各々「日割」を定めて、指定された日に使用するものであり、また「御改」の試験などもここで行われた。したがって指定日以外における稽古は、各々師家道場で行われたのである。

なお、前掲の『懐郷坐談』に武芸「御改」および「日割」・「賞賜」等について載るところを略記すれば次のようである。

〔武芸御改〕

弓術：毎年正月に「御射初式」という年1回の正式な「御改」があり、その後に毎月13日に略式の「月次の御改」があった。これらは城内の大書院前庭において行われた。中小姓以上の家に生れたる者は全員参加し、15間の距離に置かれた的（径1尺2寸）の的中数によって優劣が検定され、等級により褒賞が

行われた。

馬術：毎年春ごろに1回、桜の馬場において、馬術演習の御改が行われた。

剣術・槍術・柔術等：弓術の「月次の御改」にあわせて、諸流武術の1～2流が毎月改められ、各流派必ず年1回の「御改」があった。

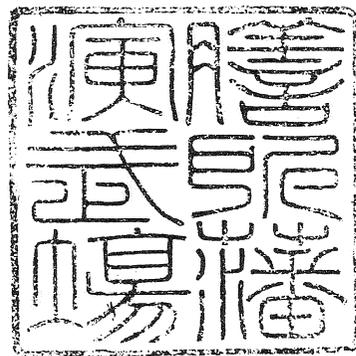
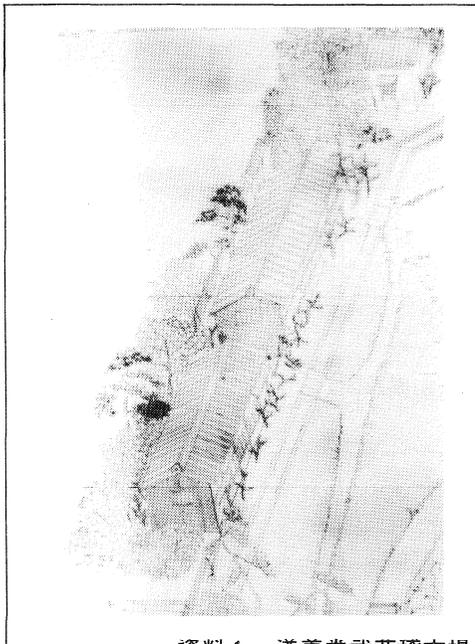
〔遵義堂演武場の日割〕

弓術・剣術・槍術は遵義堂の演武場において、1ヶ月に6回宛の日割が定められていた。そして定日には各流共に夕八ツ時から七ツ時まで稽古した。また毎年大寒の節には寒稽古があり、30日間、諸流ともに暁八ツ時から六ツ時まで稽古した。

〔武芸に関する賞賜〕

武芸諸流共、初傳（切紙）を取得した者に対しては「金百疋」、目録（中傳）は「金二百疋」、免許（皆傳）は「銀二百枚と麻上一貝」が、それぞれ与えられた。

弓・馬・剣・槍のうち、3流の免許を得たものに対しては「金七両」、文学・兵学・柔・砲の1つを加えて3流の免許を得た者に対しては「金五両」が与えられた。



資料1. 遵義堂武芸稽古場（演武場）の図およびその印影

また、遵義堂への稽古皆勤の者に対しては、一流ごとに「金二百疋」が与えられ、弓術の場合は稽古中に百射百中（15歳を超える者）、百射九十中（15歳以下の者）をした時、1回に限りそれぞれに「金百疋」・「弓一張」が与えられた。

### 3. 膳所藩武芸教育の特質

#### (1) 膳所藩武芸の全体的特質

一般に諸藩の藩校において行われた武芸種目は(1)剣術に属するもの、(2)砲術・操練に属するもの、(3)槍術に属するもの、(4)馬術に属するもの、(5)弓術に属するもの、(6)柔術に属するもの、(7)兵学に属するものに大別されるが、これからすれば、膳所藩において行われた武芸種目もこれにあてはまり、とりたてて特徴的というところはない。しかしながら、実際に行われた流派、修練方法をみていくと、ひとつの特徴的な全体的傾向が認められるように思われる。以下、それらの視点に立って、特殊な修行形態、流派の特色について個々に検討していきたい。

##### 1) 水馬、流鎗馬、打球等について

膳所藩では毎年夏に勢多川において水馬の修練があった。この水馬に関してはいくつかの逸話が残されており、水馬の妙手も多かったという（『近江今昔<sup>14)</sup>』375頁）。このような水馬の修練をした藩はそれほど多くなく、膳所藩武芸の特色の1つとみることができる。水馬の術は通常水練に属するもので、水練さえも諸藩において行われたところは「全国三十余藩に過ぎない<sup>9)</sup>」とされているので、水馬においては、なお少なかったとみられる。

前項で述べた「御改」の制度から考えて、膳所藩において最も重要視されたのは弓術であろう。もちろん武芸のうちでは弓術が最も格上であるということもあろうが、「御改」において的中数のみによって優劣を判定して、等紙により褒賞が行われたことから考えて、戦場武技修練として弓術を必要欠くべからざるものと考えていたのであろう。このような水馬、弓の的中修練などの実戦的な戦場武技修練をさらに補完す

るものとして流鎗馬、打球等の中世的な弓馬術が行われていた。『懐郷坐談』にこれらについて次のように記されている。

「競馬、流鎗馬（馬射）、打球の式等は此所（注：桜馬場のこと）に於て挙行ありたりき。天保度以来是等の武術に堪能の聞へありしは河合次郎大夫、木村彌一右衛門とす。又た敵隱の馬術にありては永田靱負某妙を得たり。通常馬術演習は毎年春季に行はると雖とも流鎗馬、競馬、奉射的、草鹿、百手式等の古式は概ね藩主に於て祝事ある時挙行する事となれりき。」

流鎗馬などたしかに祝事との関連で儀式的に行われるものではあるが、本来極めて練武的であり、弓馬に勝れていなければなしないものである。これの行われた桜馬場は、平素よりこれらの修練をとおして実戦的な弓馬術が修練されうる施設と規模の大きさを持つものであった。（資料2. 参照）

##### 2) 今枝流剣術について

寛政2年（1790）に著わされた『撃剣叢談<sup>11)</sup>』に今枝流については、「此流のおしへ、足のはこび甚だ六ヶ敷也。此も勝負にて仕立てる流也」として、試合などの「撃剣」稽古をもする流派とされているが、これは今枝流二代目の四郎右衛門良政の甥である今枝佐中良台が創始した理方一流系の後世における形態のことであり、膳所藩における古今枝流ともいべき系統は、居合をその柱とするものであったとみられる。

今枝流の伝書については安永2年（1773）に今枝佐中良尚が著わし、それを膳所藩の師範である今枝良温が安政4年（1857）に写した『初實劔理方兵技録<sup>10)</sup>』がある。これは今枝流の技法全般について書かれたものであるが、その内容はおおよそ居合・立居合等に関するものであり、特徴的なところは刀を鞘から抜かない状態、つまり鞘ごとで刀を使用する技法が色々述べられているところである。居合を主とする流派においては抜きつけの一瞬が勝負であり、安易に刀を抜いてしまうことは許されないのであろう。

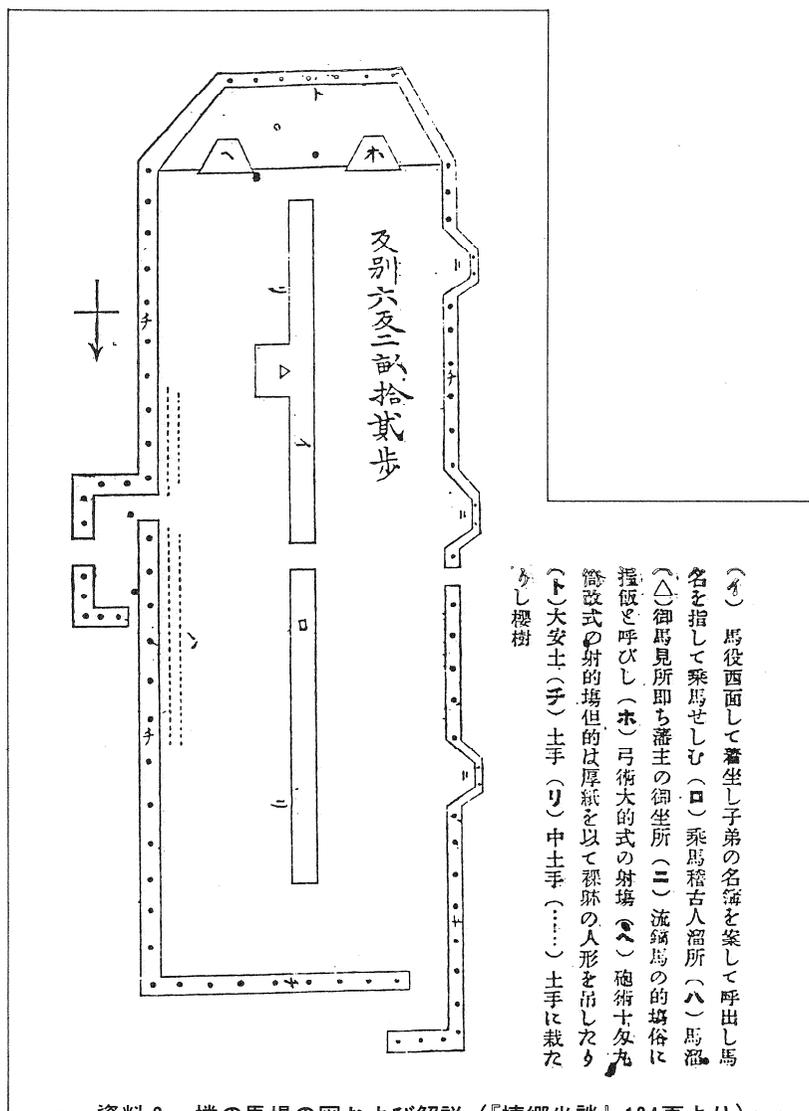
榎本鐘司氏が調査した『幕末諸藩における剣

術流派と竹刀打込試合剣術の伝播情況一覽（その1）』（武道学会第15回大会研究発表等抄録，1982）によると，幕末の頃今支流が行われていたのは膳所藩をはじめとして越前の大野藩，美作の津山藩（ここでは理方一流という），鳥取藩，小倉藩などであり，このうち大野藩と津山藩の今支流は試合剣術を採用しており，膳所藩と鳥取藩，小倉藩の今支流は試合剣術を採用した痕跡がみられないとされている。したがって後者の3藩において伝統的な居合を中心とした技法が守られていたと考えられるが，このうち

鳥取藩では安政期に剣術は竹刀剣のみとされ，今支流は行われなくなった。これからすると膳所藩の今支流は今枝の本流でもあり，かつ維新时期まで続いたことにおいて非常に重要な流派であるといえる。ここでは資料不足のためにこれ以上立ち入って述べえないことは残念であるが，これについてはさらに調査し明らかにしておく必要がある。

### 3) 関口流，白現流柔術について

関口流は本来関口新(真)心流といい，その修練形態は一口にいて戦場組み打ちの技を修練



資料2. 櫻の馬場の図および解説（『懐郷坐談』134頁より）

するものである。柔術の流派の中では、竹内流、荒木流につづいて古く、その成立は1600年代の初頭である。その技法は、「無手」で相手に対処するだけでなく、捕縛、甲冑組打、居合、太刀等があり(『柔道史攷<sup>16)</sup>』47～63頁)、たとえば後世においてこのなかの居合が新心流居合として分化していったものもある。

文化年間(1804～18)の膳所藩の師範は神谷玉城であったが、これが小野重太に与えた『関口流戦場利方目録<sup>17)</sup>』(114～6頁)をみると膳所藩における関口流の特徴が際立っている。これには前半は太刀、組打、捕縛等に関する項目が記され、後半には「馬上之利方」として、例えば「一、歩行武者馬上組打之事」とか「相馬上ヨリ組落之事」といった騎上での組み打ちに関する項目が記されている。これから推察するに膳所藩における関口流はより実戦的な総合武術的特徴を持つものであったことが理解できる。これらの修練は、道場内よりもむしろ桜馬場などにおいて行われたものであろう。

膳所藩の自現流は正しくは無二無三自現流である。明治22年(1889)4月14日に本多神社に奉納された額にはそのようにある。またこの奉額には大小一対の木刀が掲げてあり、これからして無二無三自現流が単なる柔術のみでなく、太刀、組み打ち等を含むものであったことがわかる。自現流柔術について知る資料は今のところ皆無であるが、今治藩に無二無三自現流剣術があり、これについて牟田文之助の『諸国廻歴日録<sup>12)</sup>』の中に「流ぎは無三自現流として柳剛流同様足打稽古ニテ候」という記述があり、非常に実戦的な流派であることがわかる。無二無三という流名から、荻生徂徠の『鈴録<sup>18)</sup>』にある「謙信流ニ遮神無二剣ト云太刀アリ。沈ンデ足ヲ敵ノマタノ間ニ踏チガヘ、太刀ノ鋒ヲアゲ、柄ヲ地ニ着ホドニシテ、敵ノホツテノ下ヲ下ヨリ無二無三ニ突クナリ」という一文が想起されるが、無二無三自現流とはこのような戦場武技的な流派に由来するものであろう。

江戸時代に入って、関口流よりあとに出現する渋川流や起倒流といった流派は、戦場武技的

な色彩を薄くし、例えば渋川流などは修行の方法として「反求」・「積徳」・「尽思」が、平常の修行の工夫として「正體」・「調息」・「養気」が重要視され、身心修養的な側面がうち出されていく(『柔道史攷<sup>16)</sup>』64～76頁)。そして松平定信が起倒流に熱心であったように、江戸時代の中期から後期にかけてはこれらの流派が弘流していく。このような傾向の中にあつて、関口流、無二無三自現流を固守した膳所藩は、やはり武芸において一種の独自の傾向を持っていたといえよう。

以上1)から3)までに述べてきたことから考えて、膳所藩の武芸教育の特質は、一つに戦場武技的技法の総合的・実戦的修練にあつた。二つに水練における水馬術、流鏑馬などの弓馬術の修練、関口流柔術における馬上組打などにみられるように多くの武芸が乗馬術と結びついてあらゆる状況における操馬術が修練せられたこと、三つにそれら戦場武技の修練という目的の上になつて各流派とも修練形態に工夫がなされ、伝統伝系流派の相伝形態には、あまり固執しなかつたことにあつたと考えられる。

## (2) 幕末における膳所藩の剣術

前述したように、膳所では古くから今枝流があり、それに天心独明流、成孝流などがあつた。その後、天保期に至る前に長沼系の直心影流が入り、天保期以後、男谷派の直心影流が長沼派にとってかわることになった。したがって、幕末期の膳所藩においては、今枝流、天心独明流、成孝流および直心影流男谷派の4流派が行われたのである。

これら4流派があるとはいえ、竹刀打込試合剣術を採用して試合を積極的に実施していたのは直心影流男谷派だけであつたと考えられる。このことは、前述したように今枝流が居合を中心とした形剣術であつたことや各種の試合英名録(他流試合をした流派、人名等を書き残した小帳簿で廻国修行時の剣術英名録や道場の来客簿的な来訪剣術英名録など各種ある<sup>1)</sup>)に膳所藩の流派・師範名として直心影流男谷派の人物しか出てこないことなどから判断されることで

ある。例えば、嘉永4年(1851)10月月1日に神道無念流齋藤弥九郎練兵館塾頭佐藤常次郎が膳所藩を訪ずれて遵義堂で試合を行ったが、その相手は直心影流男谷派の岡田藤(東)太郎門下10人のみであった(資料3参照)。

膳所藩で他流試合が許されるようになった時期は明確ではないが、東海・近畿の諸藩の中では比較的早くから他流試合が解禁されていたものとみられる。前掲の『弘化5年諸国剣家姓名録』に高橋権太兵衛と岡田藤(東)太郎の名があげられていることからして、天保期末から弘化期のころに他流試合が行われるようになったものと考えられる。そして、『懐郷坐談』にあるように、後には武芸修行者宿を中大手前の山形屋と定めたり、修行者来訪の際の諸事項等も慣行化されるようになった。

ところで膳所藩の試合剣術の実力はどうかあったのだろうか。

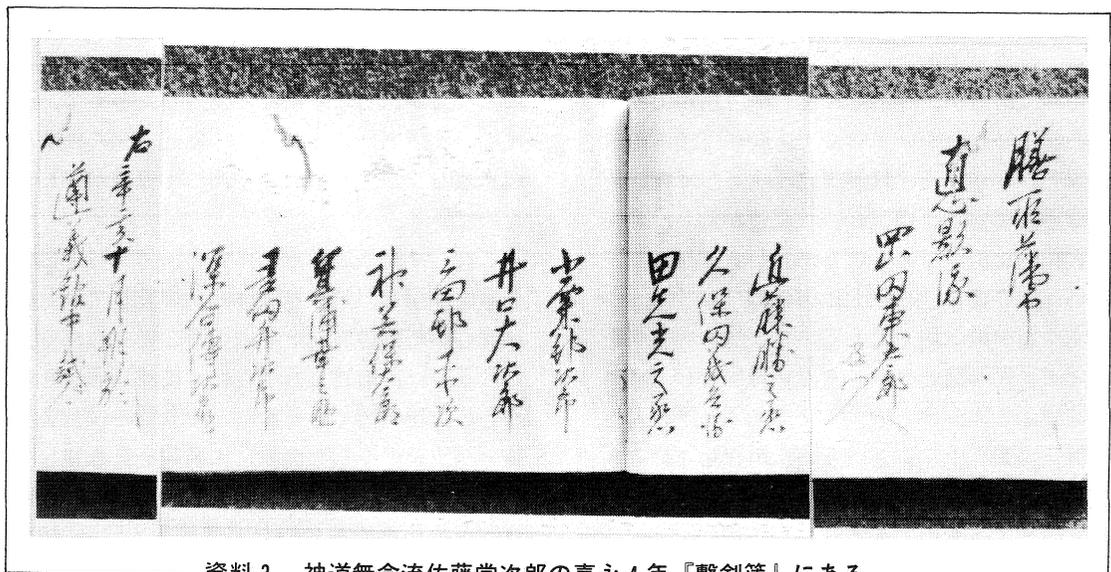
膳所藩から小野源太次郎、浅山諫、立入淳蔵らが江戸の男谷道場で修行をしている時、久留米藩の神陰流加藤田平八郎の一行が道場を訪ずれ、この時小野源太次郎が彼らの相手をした。その時の様子について『加藤田平八郎東遊日記<sup>13)</sup>』に次のように述べられている。

「十一月五日男谷門人江州膳所藩小野涯源太

次郎、波多野左馬助、塚越軍治同道にて申込候に付密に姓名録開見候処源太次郎、男谷道場にて立会候者に候得共何々目に留り候程之事も無し之候間並下通之人と相心得立会候処、左右より劇敷片手突を入其突能延て速成候故三、四本被突甚手際也。」

幕末～維新时期に「日本一」と称せられた松崎浪四郎の師である加藤田平八郎に対して、小野源太次郎は左右の激しい片手突を数本決めている。膳所藩の江戸における師範であった小野源太次郎の実力はかなりのものであったことがこれより推察される。また『東遊日記抄』の巻末にある「剣術師家並びに上等之門人大略」には、直心影流男谷精一郎門人の項に小野源太次郎、浅山諫(諫)、立入松助(淳蔵)らがあげられており、膳所藩直心影流の実力は、男谷門下においても高位にランクされるものであったことは間違いないところであろう。ただ、『懐郷坐談』に、次のようにあるのは若干疑問である。

「弘化の比、島田虎之助(見山と号す、豊後中津藩の浪士) 剣術を以て来る。例に依り演武場に延て順次起て技を角ふ。一刺一撃皆な見山に及ばず。衆相顧みて色を失なふ。臨監の人亦汗を握れり。当時岡田東太郎江戸に遊び男谷先生の門に在りしが、偶其父病に罹り



資料3. 神道無念流佐藤常次郎の嘉永4年『撃剣簿』にある

膳所藩関係部分(西尾市佐藤信夫氏蔵、榎本鏡司氏撮影)

帰省して家に在り。因て人を遣て見山の状を告ぐ。東太郎直に起て演武場に造り、見山と其技を角す。挑聲一響全捷を得たり。観もの皆な更生の思ひを為し歎賞したりといふ」

この記録をもとにして諸書には膳所の岡田が当時江戸で男谷門下第一と称せられた島田虎之助を破ったと述べられる。しかし、当時岡田と島田は同じ男谷門下であり、しかも岡田は島田より後の入門であるはずである。もしこの記述が事実であるとしても、島田が種々の事情を察して、同門の岡田に勝を譲ったとみるべきであろう。

牟田文之助の『諸国廻歴日録<sup>12)</sup>』の嘉永6年11月16日のところ、安政2年6月10日のところにそれぞれ次のようにある。

「膳所城下、岡田藤太郎道場相尋候処、右先立子より在府ニ相成……断ワラレル」

「岡田藤太郎、田中兵次郎へ申入候処、近来無人とて断ラル」

このように、膳所藩では常に廻国修行者を受け入れていたわけではなく、師範不在の場合は断わった。受け入れたかぎりは敗れてはならないという意識がはたらいていたものであろう。

明治期まで知られた剣術家に左山捨吉がある。小野源太次郎、浅山諫に直心影流を学び、後さらに挑井春蔵に入門して慶応2年に膳所に帰った。廃藩後も剣を捨てず、大日本武徳会でも門弟を指導し、滋賀県を代表する剣士であった。

(『大日本剣道史<sup>4)</sup>』618～20頁)

以上のように、膳所藩では直心影流の試合剣術が近隣の諸藩に比して比較的早くより積極的に導入された。これは、膳所の地が東海道や中仙道の岐点にあたり、関東からあるいは西国諸藩からの武者修行者の往来も多く、他流試合を申しこまれることが多かったからで、これに対処するには、伝統的なレベルでの実用性を有していた今枝流などでは不十分であることが早くより認識されたからであろう。また戦場武技的な実戦術を修練してきた膳所藩にとって、実用的とみられる試合剣術がかれらの武芸観に合うものであったことがその採用の大きな要因であ

ろう。ただここで特徴的なことは、直心影流採用以降の今枝流などの試合剣術以外の流派の動向である。試合剣術が採用されると、試合以外の流派は次第に衰退していくのが通常の有り様であるが、膳所ではそうならなかった。他流派も維新时期まで従前通りに行われたのである。

### (3) 徂徠学と膳所藩の武芸

遵義堂の蔵書に荻生徂徠に関する書が多いというように、膳所藩における皆川淇園の学風は、徂徠学に多くを負っていた。それゆえまた前述の淇園の武芸観は、徂徠学派の武芸に対する見方であるといえる。

徂徠の学における基本的な姿勢は、例えば、『弁名』の中で「今の学者は習ひて以て常となし、武は逢掖の事に非ずと習ひて、古意隠れたり」(逢掖は儒者の服)といっているように、江戸時代中期における宋儒の学問の浸透により、身心修養のみに関心をむける風潮のあったことを批判して、例えば「礼」・「楽」・「詩」・「書」あるいは兵学・武芸の実際の技術を学ぶことを疎かにすべきではないとするものであるといえようが、このような姿勢が兵学や武術に関する古法について述べた大著『鈴録』(享保12年：1727、荻生徂徠著)を残すことになったと思われる。

『鈴録』の内容は、「流義も面々ノ信仰スルヲ用ユベケレドモ、戦場ニテ益アルベキ流義ヲ用ユベキ事ナリ」(巻十一比較)という信念に基づき、軍学における古法について戦場武技的な各種各種武芸の古法について述べるものである<sup>18)</sup>。

以上のような徂徠の学風が膳所藩の学風となって受け継がれ、膳所藩の武芸流派の理論的基盤となり、その戦場武技的指向性を助長したことは確かであろう。また、徂徠学派の一つの特色はその放任主義にもあったといわれる。そして杉浦重剛が『旧膳所藩の学制一斑<sup>19)</sup>』の中で「自由討究の空気は自然に充滿して来た。」と言っているように、徂徠の放任的学風は膳所にもあり、それが伝統的な流派の相伝形態にはあまり固執しないという膳所藩武芸の特質となつてあらわれたように思われる。さらに、徂徠の

『鈴録』の「卷十一比較」には、「昔武士ノ居合ヲ專トシタルハ、尤ノ事ナリ」として、戦場武技として居合が必須であることが述べられているが、このような考え方が、今枝流という居合を中心とした流派を維新时期まで存命させた力となったと考えられるのである。

#### 4. まとめ

以上、膳所藩における武芸教育について述べてきたところを要約すれば以下の通りである。

- ① 寛政期以降における膳所藩の文教育は、古文辞学的方法を柱としながら、折衷学派的な考察方法をとった皆川淇園の系統の学風であり、その武芸観は、身心修行的な武芸を排して、武芸修練の目的ら戦闘のための実用的技法修練にあるとした。
- ② 幕末において行われた武芸流派は、剣術の直心影流、今枝流、天心独明流、成孝流、槍術の種田流、宝蔵院流、柔術の関口流、自現流、真妙流、馬術の大坪本流、弓術の日置流竹林派、伴道雪派、砲術の荻野流、高島流、天山流、三島流、中和流、などであった。このうちの多くは古くからあり、寛政期以降に入ったことが明らかなものは直心影流である。
- ③ 文化の初年に遵義堂が設立され、その中には演武場的な武芸稽古場も設けられた。また大規模な桜馬場もこの頃設けられた。
- ④ 膳所藩における武芸教育制度において特徴的なものとして「武芸御改」があり、弓術については毎月1回、その他の武芸については1年に1回の武芸検定があった。
- ⑤ 膳所藩武芸の特質は、近世初頭までに成立した戦場武技的修練形態を継承しているところにあった。そして特に、あらゆる状況における操馬術の修練が重要視されていた。
- ⑥ 剣術では天保期に直心影流男谷派が入り、それ以降他流試合も活発に行われるようになり、試合剣術においても実力のある剣士が輩出した。
- ⑦ 膳所藩における文教育が徂徠学的学風をもっていたことは、膳所藩における武芸修練

のあり方に論理的基盤を与え、また膳所藩武芸流派の実戦的総合武技化を助長したと考えられる。

最後に、本稿の研究目的を膳所藩の武芸教育におきながらも、藩校遵義堂の武芸教育に関する資料的不足もあって、結局膳所藩における武芸の特質のみに終始してしまったきらいがある。武芸遊学制度、流派の軽重、門人数や稽古の実態、幕末維新时期における藩校教育の変質等を明らかにできそうな資料調査がより必要であったことを反省している。且つ、膳所における今枝流剣術について今後調査しなければならないであろう。合わせて今後の課題としたい。

尚、末尾ではあるが、本研究においては、大阪大学杉江正敏氏、南山大学榎本鐘司氏、平野小学校土佐三夫氏に多くのご教示、資料提供を戴いたことを付記する。

#### 引用・参考文献

- 1) 赤松俊秀他編、日本古文書学講座 8、雄山閣、1980。P186。
- 2) 榎本鐘司、天保～弘化期における諸藩の剣術流派『弘化5年2月諸国剣家姓名録』の検討、南山大学紀要『アカデミア』自然科学・保健体育編1、1983。pp35—42。
- 3) 平田好、懐郷坐談、一成舎、1908。pp130—136。
- 4) 堀正平、大日本剣道史、剣道書刊行会、1934。
- 5) 今村嘉雄、十九世紀における日本体育の研究、不昧堂、1967。pp332—375。
- 6) 井上哲次郎・有馬祐政、武士道叢書中巻、博文館、1905。所収
- 7) 石川謙、近世の学校、高陵社、1957。pp103。
- 8) 笠井助治、近世藩校に於ける学統学派の研究(下)、不昧堂、1970。pp819—828。
- 9) 笠井助治、近世藩校の総合的研究、吉川弘文館、1960。P232。
- 10) 明治教育史研究会、杉浦重剛全集第六巻日誌・回想、思文閣、1983。pp740—750。

- 11) 三上元龍，擊劍叢談，新編武術叢書（武道書刊行会），1790. 所収.
- 12) 森銚三他編，隨筆百花苑第13卷，中央公論社，1979.
- 13) 村山勤治，鈴鹿家蔵・『加藤田平八郎東遊日記抄について』，武道学研究第18卷第2号（第18回大会研究発表抄録），1985. pp25—26.
- 14) 中神天弓，近江今昔，滋賀郷土史刊行会，1964. p375.
- 15) 大津市役所，大津市史上卷，大津市役所，1942. pp319—404.
- 16) 楼庭武，柔道史攷，目黒書店，1935.
- 17) 竹内将人，膳所藩の武道，立葵会，1976.
- 18) 渡辺一郎，武道の名著，東京コピー出版部，1979. pp295—306.
- 19) 渡辺一郎，新輯武道伝書第8冊・直心影流長沼家々譜資料，東京教育大学武道論研究室，1977. 所収
- 20) 渡辺一郎，新輯武道伝書第10冊，東京教育大学武道論研究室，1977. 所収
- 21) 綿谷雪・山田忠史，増補大改訂武芸流派大事典，東京コピー出版部，1978.

## 近江諸藩における武芸教育に関する研究（その2）

### ——幕末から明治初期における近江剣客評について——

鈴木 一郎（甲賀郡剣道連盟） 富本 一海（甲賀郡剣道連盟）  
西川 嘉一（甲賀郡剣道連盟） 土佐 三夫（平野小学校）  
村山 勤治（滋賀大学教育学部） 火箱 保之（京都産業大学）

#### 1. はじめに

王政維新の政綱の大変革により、明治9年（1876）3月の廃刀令に次ぐ脱刀令と、武士階級の崩壊とともに、折から滔々と押し寄せた欧米分化の濁流の中に剣は沈み、我が国建国以来の剣技というものを省みる者のない時代が到来した。帯刀を禁止された士族のなかには、刀を差していないと腰の座りが悪いとあって、長い鉄杖を腰に差したり、刀を袋に入れて背に負うて歩くものもあった。武士が数百年の習慣から刀と別れることは、我が魂まで奪われる心地がして無理からぬことであった。

なかでも佐賀の乱や、熊本の神風連の騒動は、いずれも維新政府の政策に対する士族の反乱であり、これらに続く反乱に神経を尖らせた府県当局では、剣道を修行するものは、また何か不穏な計画でもあるかのごとくみられ、剣道修行禁止の布達を出した府県もあった。最も厳しかったのは京都府であって、命令に反する者は、国事犯容疑者として監禁する旨の布達を府民に出していた。

明治10年（1877）西南の役のとき、薩摩兵の抜刀隊に対するに、警視局の抜剣隊が功を奏したのに鑑み、剣道が再認識せられ、明治25年（1892）になると警視庁では剣士を採用して、巡査に剣道を教授することになった。

今回本稿では、幕末から明治初期にかけて、滋賀の地で剣を執った剣客と、明治17年（1884）に籠手田安定が関西の剣士10名を引率して、警視庁剣士陣に挑戦した時の剣士の剣風、得意技、戦績等を集録し報告したい。

#### 2. 心形刀流8代目 師範 籠手田安定

##### (1) 籠手田安定の生い立ちについて

諱は伯静、号を黙斎と称し、天保11年（1840）3月21日、肥前平戸（長崎県）、松浦藩で重臣の家に出生した。幼少の頃より、藩中において心形刀流第7代の野元心斎に就いて剣を学び、14歳で藩校維新館の句読師に任ぜられた。文久元年（1861）20歳の時、藩主詮公の近習を勤めるに至ったが、慶応元年（1865）頃には、幕府の威令ようやく衰え、尊皇攘夷の声が次第に台頭し、各藩の志士は京都に集結し、朝幕の形勢を観察して風雲に乗ぜんものと、その形勢容易に逆賭しがたきため、平戸藩においても、京都に藩邸を設けて家臣を常駐させることになった。籠手田は最年少者で京都に派遣され、京阪の地で国事に奔走していたが、その間も剣の修行を怠ることなく、当時京都一の大道場の戸田一心斎の下で修行を続けていた。

明治維新政府が樹立されると同時に、籠手田は幕末期の勤皇運動の功により、大津県（滋賀）判事に任用され、明治11年（1878）5月には滋賀県令に、明治17年には元老院議員に、次いで明治18年（1885）9月4日付をもって島根県知事となり、明治24年（1891）4月には新潟県知事に補せられたが、明治29年（1896）2月4日付で、再び滋賀県知事に補せられた。しかし、翌30年（1897）4月8日には知事を休職、同年12月28日付をもって貴族院議員となる。明治32年（1899）3月30日、特旨をもって正三位勲一等男爵を授けら

れ、同年4月1日大津市錦織の自邸において病死した。享年60歳であった。

(2) 籠手田安定の剣歴について

籠手田は、『大日本剣道史』<sup>1)</sup>(p607)によれば、「明治七年滋賀県在職中大津警察署に於て、山岡鉄太郎と試合して、敬服して隨身し、後皆傳を得た」とあり、山岡に出会い試合をして敗れ、後に一刀流正伝無刀流の免許を受けている。明治13年(1880)頃神道無念流の達人であった大村藩(長崎県)出身の渡辺昇とともに、籠手田は剣豪をもって知られ、それも武一辺倒の人ではなく、文武両道に秀でていて、両剣豪ともに剣道の再興奨励宣布に努めた。籠手田は明治初期から中期にかけて、滋賀の地で前後20年にわたり、自らが竹刀を執って大津警察道場の養勇館で指導奨励した。この道場を「養勇館」と命名したのは、山岡鉄太郎であり、ここに掲げた養勇館の額は籠手田の請いに応じて山岡が揮毫したもので、この額について、明治13年7月11日の『滋賀日報』<sup>6)</sup>には次の記事がある。

「宮内省大書記官山岡鉄太郎の揮毫にて、養勇館と大書せる額を、別所村巡査撃剣場に掲げられしが余程見事なもの由。」<sup>4)</sup>とある。「養勇館」と書いた扁額は、宮内省の済寧館道場と大津の警察道場の二面のみである(資料1参照)。



資料1. 一刀伝無刀流始祖 山岡鉄太郎が揮毫した「養勇館」の扁額(鈴木一郎撮影)

数多い籠手田の剣道奨励のなかでも、特筆すべきものは、籠手田が関西の剣客10名を連れて、明治17年10月に警視庁剣客陣と対戦した壮挙である。先ず関西勢の顔ぶれは、滋賀の高山峰三郎、左山捨吉、岡山から奥村左近太他2名、福岡から綾野警部、浅野一摩、後

藤某、静岡から2名という精鋭であった。これを迎え撃つ警視庁側は、これまた錚々たる剣客が群がり、庁内一の強豪と称される逸見宗助を筆頭に、突きの鬼秀でその名も高い下江秀太郎、稀代の早業師の真貝忠篤、二刀流の名人で三橋鑑一郎、小手打ちの名人の得能関四郎があり、柿本清吉、上田右馬之助、渡辺楽之助、兼松直廉と、いずれ劣らぬ一騎当千の強豪が顔をならべていた。この戦況については、高山の章で述べることにする。

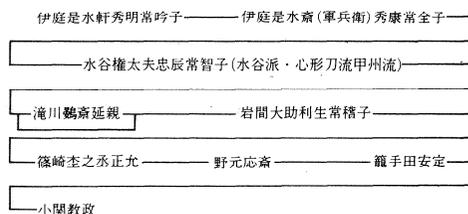


図1. [籠手田安定関係心形刀流系図]

籠手田は心形刀流第8代の達人であったが、ここで心形刀流についてふれておきたい。近世随筆の王と称された旧平戸藩主松浦壹岐守清(静山)が著した『甲子夜話』<sup>3)</sup>に心形刀流弁解について次のように書かれている。

「心形刀流の流名について

心形刀の心は己が心、形は軀の形、刀はその用いる刀である。従って心形刀は剣技の総名であって、我が流のみのものとしてならない。然る我が剣生は、その実を知らないため、これを流名と思い、他流の人も心形刀とは他の流と考えている。不学未熟な者にとっては無理からぬことである。いずれにせよ、心形刀とは術理の真諦を指したもので流名ではない。確かに心形刀一味の境地は、凡ゆる流派に共通した術理の真諦である。」

と教えられている。

籠手田関係の心形刀流系統は『武芸流派大事典』<sup>9)</sup>(p398-400)を参照すれば図1のとおりである。

### 3. 一刀正伝無刀流始祖 山岡鉄太郎

山岡鉄太郎(鉄舟)は滋賀の人ではないが、滋賀の剣道を語るときに山岡の名を落とすことは、片手落ちのような気がする。山岡と滋賀の剣道のつながりについて述べてみたい。

先ず幕末の三舟という言葉があり、三舟とは、高橋泥舟、勝海舟、山岡鉄舟の3人を称したものである。この3人は王政復古の時代に、それぞれ大きな役割を果たした人である。頭山満翁の『幕末の三舟伝』によると、「泥舟は意の人、海舟は智の人、鉄舟は情の人と評し、人物としては泥舟が一頭他を抜いた」とあり、鉄舟は思いやりのある人物であると評している。

山岡の出生は、天保7年(1836)6月10日、6百石の旗本で江戸浅草の御蔵奉行を努めていた、小野朝右衛門高福の四男として出生、名を鉄太郎、諱は高歩、鉄舟と号した。剣は9歳から江戸で久須美閑適齋について真陰流を学び、鉄太郎が10歳のとき、父が飛騨高山の郡代を務めることになり、父に伴われて高山に移り、剣は父が江戸から高山の修武館に師範として招いた北辰一刀流の井上清虎に学

び、書は高山の岩佐一亭に就いて学び、15歳のとき師の一亭より弘法大師流入木道第52世の免許を受けて一楽齋と号した。飛騨高山での父の死後は、江戸に帰り、文久3年(1863)28歳のとき中西一刀流の浅利又七郎義明に入門し、禅に参じて剣禅一如の追求を始め、以来18年間厳しい修行のうへ、明治13年3月30日に、一刀流所伝の無想剣の極致を得た<sup>10</sup>。

山岡鉄太郎関係の一刀正伝無刀流の系統を前掲の『武芸流派大事典』<sup>9)</sup>(p69-70)を参照に系図をかけば、図2のとおりである。

### 4. 直心影正統流 高山峰三郎

#### (1) 高山峰三郎の生い立ちについて

高山は天保3年(1832)伊予(愛媛県)大洲藩士の家に出生、7歳のとき父に伴われて江戸に出て、直心影流を藤川弥次郎右衛門貞近に学び、その後、忠也派一刀流を近藤弥之助に、次いで慶応2年(1866)には鏡心明智流の桃井春蔵に入門し、桃井家は代々春蔵を襲名して高山が入門したときは春蔵直正であった。当時の桃井道場には、上田右馬之助、兼松直廉、阪部大作、久保田晋蔵の4剣士の強豪達があり、高山は鍛えられた。明治元年(1868)に京都へ来て、同藩同流の京都一と称せられる戸田一心斎の道場で師範代を務めていた。そのころ出雲(島根県)の売布神社の神宮青戸建行が、高山の稽古ぶりに魅せられて、松江藩の師範に推挙し、32歳のときに松江藩に召し抱えられた。明治4年(1871)の廃藩とともに浪人となり、京都に戻って来たが、戸田道場時代の剣友籠手田安定のはからいで、滋賀県警察撃剣専務に採用された。

高山の弟子のなかには、優れた剣士が多いが、なかでも注目すべき剣士は、前述の売布神社の神宮の青戸建行の実弟の青戸波江である。彼は12歳のときに高山に入門し、剣を学び、研鑽をつづけ明治14年(1881)に印可を受けた。明治15年(1882)には、国学院大学の前身である皇典研究所で、建学の精神に基づき、体育は剣術であり、当所の初代剣術師

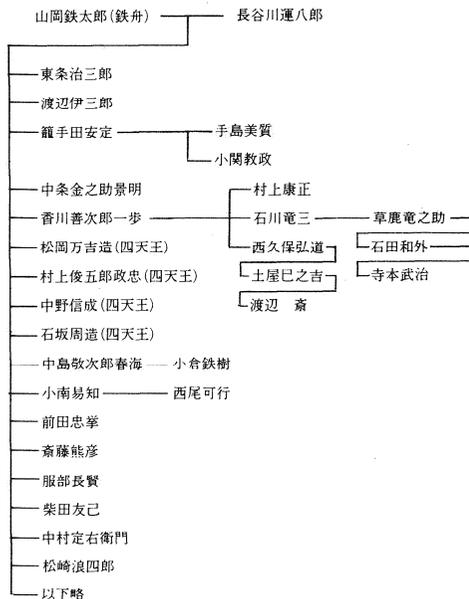


図2. [山岡鉄太郎関係一刀正伝無刀流系図]

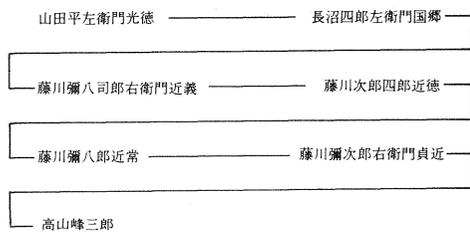


図3. [高山峰三郎関係直心影正統流系図]

範を25歳の若さで波江が務めた。高山関係の直心影正統流系図を『大日本剣道史』<sup>1)</sup>(p612)を参照すれば、図3のとおりである。

## (2) 高山峰三郎の剣歴について

高山は明治17年(1884)10月に籠手田が、関西の剣士10名をもって警視庁剣客陣に挑戦したとき関西連合軍の主将として参戦した。その試合のルールは、時間は無制限3本勝負の勝ち抜き戦であった。立会(審判)は関西側から籠手田安定、警視庁側から梶川義正が務めた。その試合の内容は、先鋒戦では、先ず関西陣が緒戦は勝った。警視庁の次鋒が3人を叩いて、その後は1勝1敗を繰り返していたが、警視庁の中堅で小手打ちの名人技のある得能関四郎が、得意技で関西陣の4人を倒した。関西陣の最後は、高山峰三郎が得能関四郎と戦い、高山は得意の突で楽勝した。続いて真貝忠篤にも突と面の二本連取して勝った。次に蟹の異名をとる三橋鑑一郎の二刀流に対しても、豪快に突を決めて勝った。副将戦は、高山が桃井道場での修行時代の先輩である兼松直廉と対したが、高山の一方的な内容で勝った。大将戦は、逸見宗助と対戦し、高山は中段、逸見は上段に構え、高山が突き出るところを出端の面と小手を連取して逸見が勝った。この高山の戦いぶりについて、山岡鉄太郎に招かれて、東京の武術永続社で剣術指南を務めていた久留米藩松崎浪四郎が、郷里の剣友の園田徳太郎に知らせ送った書簡に「高山ハ有名ナル達人ニ而、体格大丈夫、力量モアリ業前達者、歩合ニ於テハ能ク出来申候」<sup>7)</sup>とあり、この時から松崎・高山の両人の剣技の対立がはじまった。次いで

一週間後の11月8日には、警視庁が全国から知名の剣士を招いて、弥生社の招魂祭の奉納武道会があり、高山は4戦3勝1分という好成绩で、前回警視庁で試合をして負けた逸見にも2対1で勝っている。

明治23年(1890)1月23日に兵庫県神戸警察署が主催した武道大会があり、前述の松崎浪四郎(明治21年(1888)1月4日付で京都府警察部武科教師拜命)がその戦況を書き留めた書簡の中に高山評があり、その内容は次のとおりである。

「試合一順相済候上、検証人不残、一本勝負勝残り、知事ノ好ミニテ面白キ試合出来候、老生ハ高山ト一本勝負相試候処、高山ノ出頭面ニ打込ミ、高山ハ老生ノ小手ト掛ケテ下太刀ニテ軽ク、老生打込ミタルハ手元高く、十分ノ七三ノ相打、更ニ二回目ノ試合ハ高山遠間ヨリ乗り込ミ候ニ付、老生ハ間合ヲ外シ候得共、太刀先右面ニ被打込、乍遺憾敗ヲ取り申候、一步退キタルハ大不覚、後悔罷在候、御一笑奉願候、右試合中、双方共ニ別ニ打出候太刀一本モ無之候」<sup>7)</sup>

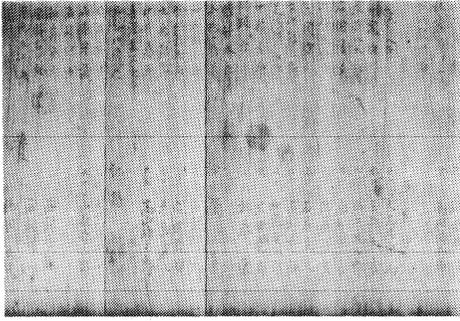
名人同志の試合で、人に教えるものが多く、名人が自ら語る失敗談は興味深いものがある。高山は明治24年(1891)には、大阪府警察部撃剣教師に採用された。このことについても松崎は郷里の園田宛の明治26年(1893)6月28日出の書簡<sup>7)</sup>に次のように書かれている。

「大阪府警察部へ有名ナル剣客高山峰三郎今般採用相成候、同人ハ無双ノ者ニ付、今後畿内ニ於テハ面白キ試闘可有之、相楽ミ居り候」

とあり、松崎が京都に居ることから、高山が大阪に来たことで、また試合ができることを楽しみにしている様子がうかがえる。

高山は明治28年(1895)10月に武徳会第一回精錬証を授与され、明治35年(1902)に65歳を以て没した。久しく京都の松崎氏と、甲越両将の如く、南北に対峙していた<sup>7)</sup>。

また、水口神社の掲額によれば、明治16年(1883)9月15日に水口藩の剣術家らが、全



資料2. 甲賀郡水口神社において明治16年9月15日に行われた奉納試合の記録掲額  
(鈴木一郎撮影)

全国各地から剣客を招いて各種試合を行っており、この試合の「検証」を高山が行っていることから、水口神社の境内に於て行われた試合は、かなりレベルの高いものであったと思われる<sup>5)</sup> (資料2参照)。

## 5. 直心影流 左山捨吉

### (1) 左山捨吉の生い立ちについて

滋賀県人として、最初の武徳会剣道範士の称号を拝受された左山捨吉は、天保10年(1839)5月9日、膳所藩士の初田与一の三男として出生。同藩の左山又蔵の養子となり、幼少の頃より藩中において、小野源次郎、浅山鍊について直心影流を学び、父の参勤交代に伴われて江戸に出て、桃井春蔵直正に入門して鏡心明智流を学んだ。慶応2年(1866)に膳所へ帰ったときは、27歳であった。戊辰戦争には膳所藩兵として従軍し、廃藩後は、籠手田安定の配慮で、滋賀県警察撃剣専務に採用され、高山とともに教授にあっていたが、籠手田は元老院議員となり更に島根県令に転じ、高山も籠手田とともに島根に行くに及んでからは、滋賀では左山が主任教授を務めた。

籠手田が島根から新潟県知事に転任してからの、明治24年(1891)左山は武者修行のため、関東から新潟へ廻り籠手田を訪ねている。

新潟で教授していたとき、富山県の師範にとの誘いがあり、その後は富山県・兵庫県警

察部の剣道師範を務め、大正3年(1914)神戸において病死した。享年74歳であった。

### (2) 左山捨吉の剣歴について

左山は、明治17年(1884)に籠手田が関西の剣士10名を連れて警視庁に挑戦したとき、左山は参加していたが、戦評を見出し得ず、戦況を知ることができない。同年11月8日の弥生社の招魂祭の武道大会では、左山は第1戦で松原義正と対戦して3対2で勝っている。第2戦で左山は、雨宮真三郎と顔が会い、3対2で敗れている。明治24年1月23日に兵庫県警察部が主催した武道大会は、京都・大阪・滋賀・岡山・香川・徳島・山口・鳥根・鳥取の2府7県にわたる知名の剣士を集めての大会で、左山が高点を得て、兵庫県知事林薫は、兼光の刀2尺3寸を賞として与えた。その他、京都の上京警察署が主催した大会では、左山対松崎がまた大阪府警察主催の大会では、奈良の佐藤政春と、また京都の川端警察署新築落成式の武道大会では、兵庫の高橋起太郎とそれぞれ試合を行ったが、勝敗、内容については不明である。しかし対戦者のいずれもが、一流の大家であることから左山の地位を知ることができる。なお晩年の明治42年(1909)5月の武徳祭の大会では、高齢者の試合が一組あり、宮崎県の大内太郎(76歳)と、兵庫県の左山捨吉(72歳)が立ち合って、結果は引き分けであった。

左山の弟子には、大日本武徳会本部剣道科教授と、武徳会教員養成所剣道科主任教授を兼務していた湊部邦治がいる。もう一人は、明治、大正、昭和の年代に薙刀を執っては無敵と称された女傑で、直心影流薙刀第15代の園部秀雄女である。秀雄女は神陰流第7代の山田一風斎を流祖とする。第14代の佐竹鑑柳斎夫人の茂雄女について直心影流薙刀と柳剛流薙刀を併せて学び、直心影流剣術を左山から学んだ。師伝の技に創意を加えて、直心影流薙刀25本に統一して、現在16代は秀雄女の長女の朝野女史が継承している。左山関係の直心影流は『武芸流派大事典』<sup>9)</sup> (p329-331)

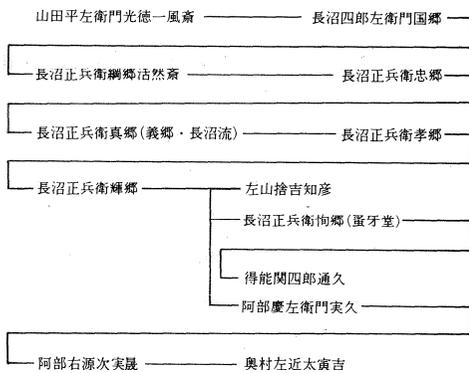


図4. [左山捨吉関係直心影流系図]

を参照すれば図4のとおりである。

左山捨吉の称号

明治32年(1899)5月 武徳会精錬証

明治38年(1905)4月 武徳会教士号

明治42年(1909)5月 武徳会範士号

## 6. 田宮神剣流 高橋笈次郎

高橋は伊予西條藩の人で、森惣兵衛經典に就いて田宮神剣流を学び、滋賀の高橋、岡山の奥村左近太、東京の三橋鑑一郎の3剣士を日本二刀遣いの3名人と称せられた人である。

明治17年7月28日に神戸の湊川神社が主催した奉納武道大会のとき、高橋(53歳)と岡山の奥村(42歳)が相二刀で対戦している。勝負は年齢的にみても、元気一杯の奥村に歩があり2対1で高橋が敗れている。高橋関係の田宮神剣流系図は『武芸流派大事典』<sup>9)</sup>(p558)を参照すれば、図5のとおりである。

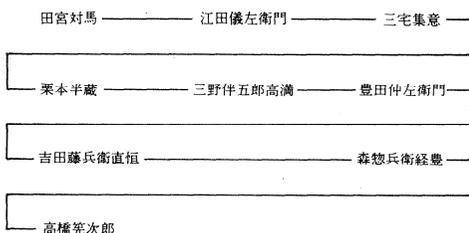


図5. [高橋笈次郎関係田宮神剣流系図]

## 7. 加藤田神陰流第11代 松崎浪四郎

(1) 松崎浪四郎の生い立ちについて

松崎は、滋賀に住んでいたという人ではないが、滋賀にいた高山峰三郎とは、終生剣の

対立をつづけた。晩年には京都に住んでいたため再三滋賀を訪れていた。

松崎は天保4年(1833)2月10日、久留米藩士で松崎八右衛門の二男として出生。11歳のとき藩の剣術師範で加藤田神陰流第10代の加藤田平八郎に入門し、16歳のとき免許を受け、安政元年(1854)21歳にして免許皆伝であるところの奥免許を受け、加藤田神陰流第11代を継承するに至った。

(2) 松崎浪四郎の剣歴について

安政2年(1855)3月藩命により武者修行に江戸へ出た。江戸滞在中の動静については、『浪四郎先生履歴書』<sup>7)</sup>の一節を引用すれば、

「因シテ江戸ニ至ル、幕府ノ上覧ヲ得テ、斉藤新太郎、千葉栄次郎、桃井春蔵ノ各名家ト剣ヲ試ミ、千葉ニハ勝ヲ得、桃井氏トハ一勝一敗不決シテ分ル。亦来客藩人ト日日剣ヲ試ミ大イニ名ヲ得ル、此ノ時ヨリ山岡鉄太郎ト深く交ハル、江戸ニ居ル年余ニシテ国ニ帰ル」

と記されている。明治17年に、山岡鉄太郎の招きによって再び上京し、鷺尾隆聚の主催する武術永続社の剣術指導の技術面を担当していたが、たちまち経営に破綻を生じて解散の止むなきに至った。明治18年(1885)4月15日付で、宮内省濟寧館武道御用係を拜命したが、家庭の事情により同年10月20日に辞職した。明治21年(1888)1月4日京都府警察部巡査教習所、武科教授を拜命して月俸20円を給せられた。明治29年(1896)6月19日、病気のため京都の自宅で64歳の生涯を閉じた。

松崎が演じた名勝負は数多くあるが、ここでは、各地の大会でよく顔の会う剣士の名を掲げるだけにとどめておく。滋賀の高山、左山をはじめ徳島の小南易吉、津田一敬、中島春海、香川では香川善次郎、岡山の奥村、兵庫の高橋八助らの超一流の名剣士ばかりであった。松崎関係の加藤田神陰流系図を『武芸流派大事典』<sup>9)</sup>(p191)を参照すれば図6のとおりである。

明治28年(1895)武徳会第1回精錬証授与

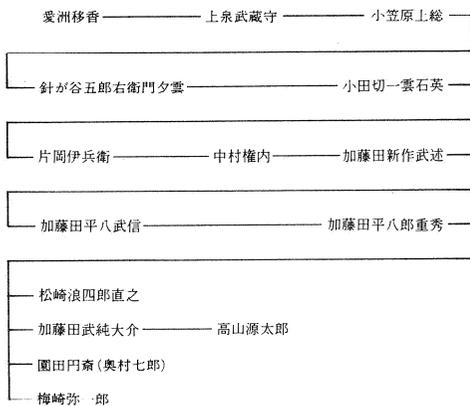


図 6. [松崎浪四郎関係加藤田神陰流剣術]

## 8. 心形刀流第9代目 師範 小関教政

明治4年(1871)京都府亀岡の武術家で小関教道の二男として出生。8歳のころから父の教道に就いて剣術を学び、それにしても10年間ほどは切り返しと打ち込みの稽古だけで、決して試合稽古などは許されなかった。18歳になると基礎教育の完成とみて試合稽古を許可された。明治24年の春には新潟に心形刀流8代の籠手田安定を訪ね入門し、その年に籠手田から免許を受け、心形刀流第9代を継承のうえ上京して宮内省皇宮警察武道世話係を拝命した(図1参照)。明治29年4月に高山峰三郎と試合を行い引き分けている。高山は既に老いたりといえども一躍小関の名を高めるに至った。小関は新潟、東京、滋賀、京都、台湾、福井、石川、山形、大阪を転々とし、最後は大陸へ渡り関東庁で師範を務めていた。昭和4年(1929)に宮中で催された昭和天覧武道大会には、指定選士として関東庁より出場し、またその大会の府県(指定)選士の審判員を務めた。指定選士試合では、佐賀の大麻勇次(43歳)、戸山学校の伊藤精司(48歳)、兵庫の早坂廣造(45歳)と組み1勝2敗で準決勝進出は果たせなかった。

明治38年(1905) 武徳会剣道教授与  
大正13年(1924) 武徳会剣道範士授与

## 9. 神道無念流(斎藤派) 堀田捨次郎

### (1) 堀田捨次郎の生い立ちについて

父は三重県四日市の出身で、子爵渡辺昇家の用人であった。堀田は明治16年に渡辺家の邸内で出生。12歳になると渡辺昇の微神堂に入門した。師の渡辺は神道無念流中興の祖と謳われた斎藤弥九郎道場の塾頭格を務めた。渡辺一門の稽古の凄まじさは先ず無類と言われ、堀田は12歳でありながら、日々荒稽古に堪え、15~16歳ごろには、同門の荒武者どもも堀田少年の前に遠く及びつかぬ腕前になった。堀田関係の斎藤派無念流系図を書けば、図7のとおりである。

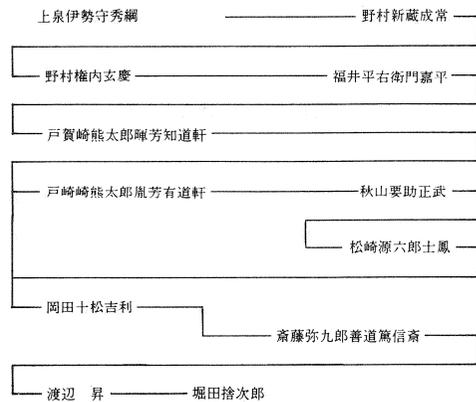


図 7. [堀田捨次郎関係神道無念流(斎藤派)系図]

### (2) 堀田捨次郎の剣歴について

堀田は明治24年(1891)5月武徳祭の大会で、直心影流第15代の園部秀雄女と太刀を合わせ、強豪の秀雄女に勝を制した。また堀田は27歳にして武徳会から剣道教士の称号を授与された俊英であった。当時30歳未満でこの称号を受けたものはいなかった。昭和4年5月宮中内で行われた昭和天覧武道大会のとき、堀田は警視庁の師範であって指定選士として出場した。

ここで昭和天覧武道大会について少しふれておこう。宮内省監修の『昭和天覧試合』<sup>2)</sup>(p2)の冒頭に「抑々我が国は、古来武を尚び、武道諸般の技術が発達すると共に、健全

なる武道精神が修練せられ、その精髓は、国民道徳の根底を成すに至って居る。この度の大會は、この歴史的事実を鑑み、一面には発達せる技術の粋をあつめて、更に一層之を錬磨せしむると共に、他の一面には、この機會において、多年修練せられたる武道精神の精華を發揚し……中略……その選士を採擇するには、最も慎重なる考慮を拂ひ、ただに技術の優秀なるのみならず、同時に人格の高尚なるべきを期した。」とある。また指定選士について『昭和天覽試合』<sup>2)</sup> (p64~65)には以下のとおり「府縣知事ニ依頼シ、管内武道専門家ヲ除ク範圍ヨリ選十一名宛ヲ選出セシメ、其ノ他ニ、宮内省ニ於テ、一定ノ方法ニ依リ全国的ニ武道専門家ヨリ選士若干名ヲ指定シ、右非専門家、専門家各別ニ試合セシムルコト」の規約に基づき、柔道・剣道共にそれぞれ指定選士と府縣選士の二つに区分された。

堀田は指定選士試合の第6部に出場した。第6部のメンバーは以下のとおりである。

- ・斎村 五郎 43歳 範士 警視庁、皇宮警察部剣道師範
- ・堀田捨次郎 47歳 教士 警視庁師範
- ・吉浦 宴正 46歳 教士 新潟県師範
- ・千頭 直之 41歳 教士 六高、武徳会岡山支部師範

堀田の試合内容は、第1戦が斎村と対戦し小手の一本一本の勝負から斎村が面を決めて堀田の1敗。第2戦は吉浦と対戦し、堀田が先に小手をとり、二本目は吉浦が面をとり、最後は堀田が突を決めて1勝1敗となる。第3戦の千頭との対戦が、同部決勝となり、堀田が面を連取して第6部の優勝を果たした。堀田は準々決勝に駒をすすめ、相手は満鉄剣道師範高野茂義(54歳)である。高野は上段に構え、堀田は晴眼に構えるが、高野が面、小手を連取して準決勝に勝ちすすんだ。高野の上段について「近間であって打下ろす太刀は、高野独特のもの、近間に這入られたが最後、最早彼れの上段を受け得るものは、当代まづあるまい。彼れを制せんとすれば、これ

を近間に入れないにある」<sup>2)</sup>と評している。

堀田の称号は、昭和15年(1940)57歳のときに範士号を授与され、昭和17年(1942)咽喉癌のため東京にて没した。

## 10. おわりに

幕末から明治初期において滋賀県に関わりのあった心形刀流8代目師範籠手田安定、一刀正伝無刀流始祖山岡鉄太郎、直心影正統流(藤川派)高山峰三郎、直心影流左山捨吉、田宮神剣流高橋次郎、加藤田神陰流11代目師範松崎浪四郎、心形刀流9代目師範小関教政、神道無念流堀田捨次郎の剣客8名についての調査を行ったが、滋賀県の剣術に直接影響を及ぼしたのは、籠手田、高山、左山の3名であった。籠手田は、明治7年(1874)に佐賀県とともに全国に先がけて大津の三井寺仁王門の近くに撃剣場を設け、関西一の剣豪として有名であった高山を師範に、滋賀県人として最初に武徳会剣道範士の称号を拝受された左山捨吉を助教に配して近代剣道の草分け的功績を残した。現代においても3者の技術的精神的指導方針は、県内の青少年の剣道指導育成に関与しているといえよう。

今回の報告は資料不足のため8名の剣客のみの調査に止まってしまった。今後は県内諸藩の剣術各流派師範の動向を探求し、籠手田、高山、左山らとの関連について調査する必要があると考える。

## 引用・参考文献

- 1) 堀 正平：「大日本剣道史」, 剣道書刊行会, 1934.
- 2) 宮内省：「昭和天覽試合」, 大日本雄弁会, 講談社, 1930.
- 3) 松浦壹岐守清(静山)：「甲子夜話」, 徳間書店, 1978.
- 4) 三宅忠七：「滋賀日報」, 滋賀日報社, 1888.
- 5) 村山勤治：「幕末期における近江諸藩の剣術について一膳所・水口両藩の剣術流派

- とその特色について－」，武道学研究，第19巻第2号，121-122，1986.
- 6) 日本新聞協会：「地方別日本新聞史」，日本新聞協会，273-278，1956.
- 7) 園田徳太郎：「剣士松崎浪四郎伝」，久留米図書館友の会，1957.
- 8) 頭山 満：「幕末の三舟伝」，講談社，374，1930.
- 9) 綿谷 雪・山田忠文：「増補大改訂武芸流派大事典」，東京コピー出版社，1978.
- 10) 山田次郎吉：「日本剣道史」，一橋剣友会，362-366，1925.

## 幕末から明治初期における近江剣客評について（その2）

鈴木 一郎（甲賀郡剣道連盟） 今里 正克（京都産業大学）  
富本 一海（甲賀郡剣道連盟） 綱村 昭彦（光華女子短期大学）  
西川 嘉一（甲賀郡剣道連盟） 村山 勤治（滋賀大学）  
土佐 三夫（長等公民館）

### 1. はじめに

明治10年（1877）西南の役のとき、薩摩兵の抜刀隊に対して、警視局（明治13年警視庁に改称）の抜剣隊が功を奏したのに鑑み、剣道が再認識された。明治13年（1880）5月になると、警視庁では剣客を採用して警察官に剣道を教授することになった。しかし、各府県の官途では武道というものは、明治15年（1882）までは全く行われていなかったが、すでに滋賀県においては、明治7年（1874）に佐賀県とともに全国に先がけて、時の滋賀県令で心形刀流の達人であった籠手田安定が、朋友互いに信義を重んずるところに、武道教育の特色があるという信条の下に、大津の三井寺の仁王門の近く（当時の別府村）に撃剣道場を設け、師範には高山峰三、左山捨吉を採用して、県令自らも道場に立って指導奨励した。そのころには鳴る腕して世に隠れていた剣士たちが、滋賀でのこの快拳を伝え聞いていた、各地から滋賀へ馳せつける剣士が、その後も絶えなかった。そして籠手田は、剣道再興に先鞭をつけたという日本剣道界の恩人であるとともに、滋賀は剣道再生の故里というべきであった。

なお、前々号<sup>1)</sup>において、滋賀県にかかわりのある剣客と、明治17年（1884）に籠手田安定が、関西の剣士10名を引率して、警視庁に挑戦した時の剣士等の報告を行ったが、本稿においても、ひきつづき滋賀県の地に関係する剣士と、県内出身剣士と試合などでかわりのあった剣客・得意技・戦績等について報告したい。

### 2. 一刀正伝無刀流 香川善次郎

この剣客は、後年には山岡鉄太郎の春風館道場で、小南易吉とならび鉄門の双壁と称される至った人であり、明治13年に滋賀の籠手田安定を訪ね、滋賀県において剣を執った一人である。香川善次郎は嘉永元年（1848）5月14日、香川県三豊郡一の谷村字下の郷土で、香川利左衛門の二男として出生した。祖父の磯五郎という人は、武術を大に愛した人で、孫の善次郎が幼少のころから、自宅に武術家を招いて剣術を学ばせていた。善次郎が15歳の時、祖父の磯五郎は孫の善次郎を伴い、丸亀藩の武術指南役で、直清流の矢野一之進に入門を乞い修行させた。慶応元年（1865）善次郎が18歳になると単身江戸に出て、田宮一刀流の島村勇雄に入門して修行していたが、事情によって一時郷里に帰り、旧師の矢野道場で師範代を務めていた。その後、明治維新の大変革に際会して、日本古来の剣技というものを省みる者のない時代が到来し、そのうえ府県によっては、法令をもって剣道修行を禁止したところもあり、善次郎も止むなく、自宅で農業に従事していた。世の中が一応おちついてくると、全国各地で剣道の稽古が行われるようになり、そこで善次郎は明治13年8月、32歳のとき、ふたたび東京で修行をやり直そうと、その上京途中に滋賀県の籠手田を訪れ、剣道修行の素志を述べたところ、籠手田は大いに悦び激励した。またそこで偶然にも、剣の道で旧知の間柄の高山峰三郎に出会い、互いに久闊を叙し引きとめられるままに大津に旬日を過ごし、上京すると、さっそく榎原健吉の道場を訪ね、師範代を務めるか

たわら、学習院に出稽古していたが、我が意に満たないものを感じて、滋賀で籠手田から話に聴いた、山岡鉄太郎の春風道場の門を叩いて入門した。そのときの様子を、香川の覚え書きというものがあるので、引用して、動静についてふれてみたい。

「…刺を以て志願を陳べ取次を乞ふ。直ちに通ぜしや、先生早くも稽古支度をなし道場に出たり、急ぐべしという。先生の態度斯の如く急激なる故、余も大いに轢易し、亦道場に至って願意の挨拶をなさんとするも、先生唯、一見の目礼のみ、餘は人の無きが如くせり、其容猊魁偉、眼光炯炯、人をして心胆を寒からしむ、余は勿卒に身仕度を成すも、既に機先を制せられ、早くも

胸中煩悶を覚え、立たざるに先だち肩に息する有様なり。是れ則ち立たざる前の勝負なる乎。」<sup>2)</sup>と記している。

入門早々の1月より、午前6時から午後6時まで、死一步前の苦行に堪え、明治16年(1883)になると、山岡の斡旋によって、宮内省濟寧館の武道御用係を拝命したが、明治19年(1886)になると官制改革のため職を免ぜられて、同門の小南易知とともに、春風館道場の双壁として一門の教養に努めていたが、明治21年(1888)7月には師の山岡が病死し、明治22年(1889)5月には春風館を辞して郷里に帰り、同年6月17日付をもって香川県警察部局を命ぜられ、香川県巡査教習所で教授することになる。その後、明治28年(1895)になると三重県警察部に奉職、明治31年(1898)5月依願退職。同32年(1899)11月9日から同33年(1900)2月まで佐賀県警察部。同年3月より12月まで山梨県警。同34年(1901)1月から6月まで福島県警。同年6月石川県で刑務所、第四高等学校、金沢医専に教に教授し12月14日依願退職後ふたたび福島県警、第四高等学校、住友倶楽部道場などに教授した。

香川の残した名勝負というものは数多くあるが、それらについて述べることにしたい。明治25年(1892)1月、香川県坂出警察署で、かつては春風道場の先輩である、久留米藩出身の松崎浪四郎と試合をしている。その試合の経過については、松崎が郷里の剣友に出した書簡というものがあるので、引用してその戦況を知ることしたい。



図1. 一刀正伝無刀流香川善次郎関係系図

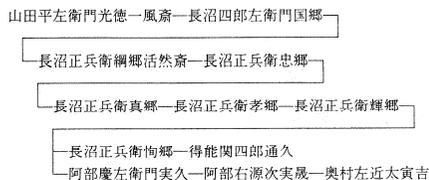


図2. 直心影流剣術奥村左近太・得能関四郎関係系図

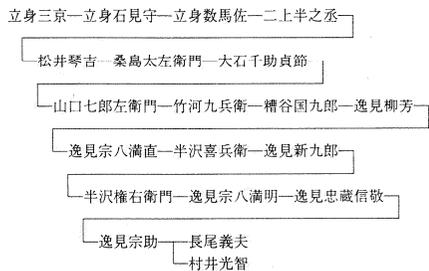


図3. 立身流抜刀術逸見宗助関係系図

千葉周作成政—千葉道三郎光風—下江秀太郎—門奈正

図4. 北辰一刀流剣術下江秀太郎関係系図

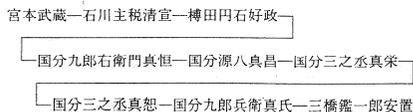


図5. 武蔵流剣術三橋鑑一郎関係系図

「香川ト対シ相勝負ニ相成候へ共、實際ハ小生ノ歩合宜敷、賞品モ小生ニ送与有之候、御一笑被下度候、香川ハ大丈夫ノ劍客、彼ノ千葉、桃井、齊藤ヨリ一層相進ミ居リ候様相考へ候、小生ハ本年耳順ニシテ、同人ニ対シテ相試候場合、御推察奉願候」<sup>3)</sup>とあって、相当手痛い試合であったようであり、香川の実力の程も窺い知ることができる。明治28年(1895)3月には京都の三条警察署が主催した武道大会のときにも、又しても松崎と対戦しており、太刀を合わせて、しばらくすると松崎が気合いとともに、初太刀の双手突きでガンと強烈な突きを攻撃すると、香川の長身がググッと後へ反ったが、後の、2本は香川が連取し前回坂出警察で松崎に1敗した借りを返したという記録がある。その後、香川は熊本の武徳殿で、旧熊本藩の師範と試合をしたことがあり、香川は下段に構えたまま、相手を迫込み道場の壁際で1本を取り、2本目も同じようにして香川が勝ったという記録がある。この試合を見ていた第3者の評に次のようなものがある。なおこの第3者とは、加藤田神陰流の宗家で、加藤田平八郎の子息で大介という人は、剣理に通じて批評の眼の高い人であった。香川の剣を評して、「香川は実に達人と言うべきで、勝敗に関せず、温容少しも変わらぬ。中島春海となると負くれば慙る色があり、まだ至らぬところがある。」と香川を高く評価した。次いで明治28年第1回の武徳祭の大会のときには、剣道の部が160組行われたが、その大会で奇しくも、また松崎と太刀を合わせることになり、結果は3対1で香川が勝ちを制している。大正10年(1921)3月7日享年74歳をもって大阪に死去した。称号は、大正9年(1920)5月武徳会剣道範士を受証した。

### 3. 直心影流 奥村左近太

この剣士は、明治17年(1884)に籠手田が関西の剣客10名を率いて、警視局剣客陣に挑戦したとき、滋賀の高峰三郎とともに関西勢

の主力として参戦した1人、で、そのころ二刀流の3名人の1人と称された。天保13年(1842)岡山藩に学者として名高い奥村七太夫の孫として出生した。父の安心は学者にしようとしたが、左近太は武術をもって身を立てたいと請うたため、父は安政3年(1856)3月、14歳の左近太を伴って、同藩の剣術指南役で直心影流の阿部右源次入門を願い、剣を学ばしめたところ、左近太は非常な天才で上達が速やかであった。その後、奥村は高橋笈次郎が使う二刀を見て、文久2年(1862)から二刀の研究を始め後年には、高橋笈次郎・三橋鑑一郎とならび日本二刀遣いの3名人の1人と称されるに至った。二刀流は左手に小太刀右手に太刀、左前の構えで、攻め込むときはジリッジリッと間合いを詰める足で絶えず床板が鳴った。そうして右足を踏み込んで左面を打ち、右面に切り返すのが得意であり、また直ちに右面に打ち込むときもあった。明治17年に関西勢が警視局に挑戦したときには、後述する軽妙無類の早業師と称された真貝忠篤と顔が合い、如何に真貝が誇る早業も、奥村の二刀の前には功を奏せず、3対2で奥村が勝ちを制した。

明治4年(1871)には、藩の武揚館一等教授参事となり、廃藩置県後は閑谷巒、並びに岡山県警巡査教習所に教授していた。明治32年(1899)9月、大日本武徳会本部剣道教授に就任したが、明治35年(1902)の春、病気のため武徳会教授の職を辞して郷里の岡山へ帰り、明治36年(1903)1月11日、享年60歳をもって岡山に没した。明治28年(1895)第1回武徳会精錬証を受証した。

## 4. 高山峰三郎らが、警視局で対戦した関東軍の剣士について

### (1) 立身流 逸見宗助

天保5年(1834)佐倉藩(千葉県)の立身流刀術と体術の師範であった逸見信教の長男として出生。父の信教について刀術を学び、嘉永4年(1851)18歳のとき江戸に出て鏡心

明智流の桃井春蔵の門に入り、後年には桃井道場では1～2位を競い、全日本においても1～2位を競い3位とは下がらぬ名人となった。明治13年(1880)7月14日、内務省警保局では巡査に剣術を教授することになり、剣術師範として、梶川義正、上田馬之充、逸見宗助、下江秀太郎の4名が採用された。明治17年(1884)に関西の連合軍と対戦のとき、警視局軍は中堅から副将まで高山に叩き伏せられて、最後の切り札として出場し、高山と雌雄を決した。その日、逸見、高山の対戦を見た山岡鉄太郎が、剣客は多くあるが逸見だけは真の剣を遣うと評した。また逸見の稽古ぶりというものは実に立派なもので、逸見の死後はその類を見ないと伝えられている。明治17年(1884)警視局で高山を2対0で撃破して、警視局の面目を維持したと言うことは前述の通りであるが、翌日、東京向ヶ丘弥生社の大会では、高山に2対1で敗けたという記録が残っている。またその日の大会で岡山の奥村左近太とは引き分けの勝負を行っている。

その後、明治19年(1886)、警視局で、この二刀遣いの奥村と剣を合わせ、奥村に取けた記録がある。その試合の経過は次のとおりである。1本目、奥村が左面を取る。2本目、逸見が奥村の咽喉を見事に突く。3本目、奥村が逸見の左面に切り込み、切り返して右面を取る。4本目、逸見が奥村の左小手を切る。5本目、奥村は小太刀をもって逸見の小手を切った。その他、多くの名勝負を残して明治27年(1894)享年61歳をもって東京に死去した。武徳会創立前に死去したので称号はない。

## (2) 直心影流 得能関四郎

小手打ちの名人として鳴らした得能関四郎俊英は、天保13年(1842)1月、上州沼田藩士の家で出生した。15歳のとき江戸に出て、そのころ江戸芝愛宕下に道場を開いていた、直心影流の長沼正兵衛尚郷に入門して修行を積み、21歳の時免許を得た俊英であった。慶応元年(1865)には師の正兵衛が病死し、正

兵衛の子の長沼秋郷可笑人について研鑽を積み、長沼道場の熟頭を務めていたが、時代は明治維新の政綱の大変革に遭遇し、武士階級の崩壊とともに、何れの道場も門前雀羅の張るが如く寂れる始末となり、そのころ失業した道場主や剣客らが計画した、撃剣興業に参加して生活を支えていたのである。明治15年(1882)になると警視局の武術係に採用されて、梶川義正、上田右馬之助、逸見宗助らと指導に当たっていたが、3先輩の死後は、警視局の武術係主任を務めていた。例の警視局においての試合のときに、警視局軍の中堅として参戦し、得意の小手打ちで続けて3人を叩き伏せ、その余勢をもって関西軍の総帥強豪高山峰三郎の牙城に迫ったものの、まだまだ格が違うか、高山には得能の名人芸も功を奏するに至らず、立ち上るや、高山から得意の豪快な必殺の突き2本を頂戴して惨敗した。その翌日の東京向ヶ丘の弥生社の大会では、九州一の名人といわれた前々号において紹介した松崎浪四郎と顔が会い、5本勝負のうち松崎に胴を1本抜かれたのみで、得能が得意の名人芸がものをいい小手3本を決めて楽勝している。この時、得能は脂ののりきった42歳、松崎は当時では高令者の部に入る51歳であった。明治28年(1895)第1回の武徳祭の大会では、日本二刀遣いの3名人の1人である奥村左近太と剣を交えることになった。その試合では、得能が奥村から小手2本を奪取して、名実とも剣道界の最高峰と称せられるに至った。明治41年(1908)7月17日、突然武士道が立たぬと言って、自宅において謎の割腹自殺を遂げた。明治36年(1903)5月に第1回剣道範士号を受証した。

## (3) 北辰一刀流 下江秀太郎

突きの鬼秀で鳴らした下江秀太郎は、嘉永元年(1848)、宇都宮藩戸田土佐守の家臣で、下江恒貞の長男として出生し、幼少の頃より父恒貞について剣を学び、安政5年(1858)11歳のとき江戸に出て、神田お玉ヶ池の北辰一刀流の千葉周作道場に入門し、周作の死後

は次男の栄次郎、三男である道三郎し指導を受けて、15歳のとき関東地方へ武者修行に出かけた。慶応2年(1866)19歳のとき、千葉道三郎の道場で熟頭を務めるに至った。また好んで朱鞘の大小を差し、朱鞘の鬼秀と称され、年令が10代という熟頭は他にいなかった。この人の稽古は大変な荒稽古で、相対した者は、初心の者であろうと鍛練者であろうと、突いて突いて突きまくるといふ稽古で、時には田舎から出て来た新入門の天狗剣士が、稽古のとき只の少年と見くびって上席に立ったが、打たれ、突かれて挙げ句の果ては下駄箱に頭を突き込われたことが度々あったらしい。常に「チョイと突いた」と言って突く、その片手突きが随分強烈であったというから、本当に思う存分突いたら息の根も止まるぐらいであった。

慶応3年(1867)20歳のときには宇都宮藩の師範を務め、明治3年(1870)23歳のとき刑部省逮捕司撃剣世話係を拜命し、その後、警視局、茨城県警、愛知県警察巡査教習所撃剣教を歴任したが、指導者としては、下手であった。修行の気が過ぎたのか、初心者に対しても「チョイと突いた」をやり、そのうえ剣先を利かして、なかなか間合に入れさせなかったのである。また奇人というか、変わり者の秀太郎は、絶対に自分の弟子をとらなかった。後年には超一流の大家となり、上段で一世を風靡した高野茂義の青年時代、水戸の師匠筋より紹介状をもらって上京し入門を乞うたところ、俺には弟子というものを持つとは思わんと、にべもなく断ったと伝えられている。自分が育てた弟子というものは全くなく、晩年は仙台に住み、明治37年(1904)5月青年時代の華やかさとは裏腹に57歳をもって仙台に死去した。称号は精錬証、範士号とも授与されていなかった。

#### (4) 武蔵流九代目 三橋鑑一郎

この剣士は、高橋笈次郎、奥村左近太とならび、そのころ日本二刀遣いの3名人の一人といわれた人で、蟹の異名で鳴らしたもので

ある。その蟹の異名の由来は、身体が小柄で2本の竹刀を立てて動く姿が蟹が蟹を立てて動く姿に似て蟹と称した。天保12年(1841)3月27日、岡崎藩の藩士で直指東軍流の剣術指南役、佐藤次太夫の三男として出生した。12歳のころから父の次太夫について東軍流剣法を学び、18歳のとき武蔵流の剣術指南である三橋家の養子となり、三橋家は武蔵流の名家であったから、同流の新宮弥次兵衛重哲について武蔵流を修行し、文久元年(1861)20歳のとき江戸へ出て、桃井春蔵道場に入門して鏡心明智流を修行した後、慶応元年(1865)12月25歳の時、武蔵流と東軍流の免許を得た。明治13年(1880)になると名古屋刑務所に剣術指南として就職し、次いで明治16年(1883)には東京警視局に師範として明治32年(1899)迄教授していたが、同年2月になると、宮内省主殿寮京都出張所剣道師範を拜命し、同年9月から大日本武徳会本部剣道教授を兼務するに至った。試合ぶりは立ち上がると、ぐんぐん敵を追い込んで勝つという強気の人であったといい、明治17年(1884)には警視局で、高山峰三郎と立ち合って手も無く敗退している。その後10年を経過して、明治28年(1895)の武徳祭の大会では高山は既に峠を過ぎた65歳という高令であり、三橋は54歳というもともと充実した時代で立ち合い、見事に三橋が全勝したという記録があり、かつては常勝高山の名を誇った時代も過去のものになって、すでに新旧交代の感が強かった。

稽古ぶりは、一刀、二刀ともによく遣い、稽古の時は二刀を遣ったという。二刀の時は右前の構えであった。この人の教えに、二刀で試合はできるが、一刀ではどうもというような者は本当の二刀遣いではない。二刀を遣わんと欲せば、先ず一刀を十分修行した上、二刀の稽古に入れとの戒めがあるが、不学の者にとって心すべきことである。

明治42年(1909)3月5日、享年69歳をもって京都で死去し、洛東黒谷墓地に葬られて石碑が現存する。明治28年(1895)に武徳会第

1回精練証を、明治36年（1903）に武徳会第1回範士を受証した。武蔵流の流系は宮本武蔵政名を流祖として、8代目新宮弥次兵衛をへて9代目を三橋鑑一郎が継承し、弟子には奥村寅吉、村木温吉、堀正平がある。

#### (5) 田宮流 真貝忠篤

稀代の早業師と称された真貝忠篤は、美濃大垣藩士で、真貝吉蔵の第七子として天保13年（1842）正月の出生した。幼名は寅松または寅雄と称したが、明治期になってから忠篤と改名した。12歳の時、田宮流の島村勇雄に入門したが、その年に両親が亡くなったので、島村道場に内弟子として住み込み、雑役をしながら剣の修行を続け、後に師に勝る技倆になり、その名は広い江戸中に響いて、島村の小奴と呼ばれ、技倆は優秀、男ぶりは良しで江戸の名剣士といわれて大変な評判であった。明治元年（1868）の奥羽戦争には、大垣藩から藩兵として従軍し、途中から尾張藩に転属させられて武勲をたてた。身体は小柄なほうで身軽に立ち廻り、無類の早業で晩年の「[歳]のころでも随分早かった。それがまた、ただ早いばかりでなく、実に見事で真の妙趣があつたといわれ、心形刀の一致で敵を釣り込んでの撃突は、何とも言い著すことの出来ない立派なものであった。

明治17年（1884）、東京向ヶ丘弥生社の奉納武道大会の時には、前掲の岡山の二刀遣いの名人で奥村左近太と対戦し、5本勝負で3対1の苦杯を喫している。軽妙無類と讃えられる真貝忠篤の早業も、二刀の名人、奥村左近太には通じなかった。その日の第2戦は、久留米藩出身の名剣士で、そのころ東京で武術永統社の剣術指南を務めていた、難敵の松崎浪四郎と剣を交えた。さて当時、松崎は52歳、真貝は42歳の元気盛りで、体力的に真貝に歩があることは当然であったが、真貝は得意の早業で小手から面、突きと、千変万化の撃突も、松崎は左に右に体を交わして反撃に出て、ついに勝敗が決せず引き分けに終わっている。名人松崎浪四郎と引き分けに終わっ

たことは、真貝忠篤の真価をいあが上にも高めた。警視庁、皇宮警察署、学習院に剣道教授を歴任し、大正9年（1920）に死去し、享年79歳であった。明治41年（1908）5月5日、武徳会第3回剣道範士を受証した。

また、真貝の名審判ぶりは剣技の早業と共に、採決の早いことも先ず無類であり、審判は終始真剣に一生懸命で、自分がしあいしている気構えで、上半身は絶えず左右に動かしていたもので、一度真貝のその姿を見た者は忘れ難い立派なものであった。

## 5. おわりに

今回の調査は、前々号によって報告した心形刀流籠手田安定、小関教政、一刀正伝無刀流山岡鉄太郎、直心影流高山峰二郎、左山捨吉、田宮神剣流高橋笈次郎、加藤田神陰流松崎浪四郎、神道無念流堀田捨次郎の滋賀の地においてのかかわりと県内関係剣士の剣風や当時の試合内容についての統報とした。

前々号の報告で紹介できなかった2名の剣客一刀正伝無刀流香川善次郎直心影流奥村左近太の生い立ちに触れ、特に県内剣士である高山峰三郎との出会いにより香川善次郎が剣術に取り組む姿勢が変化していく様子を述べた。

また明治17年（1884）に籠手田安定が関西の剣客を引率して関東の警視庁に武者修行に出かけた時の対戦者（関東関係分）立身流逸見宗助（佐倉藩）、直心影流得能関四郎（沼田藩）、北辰一刀流下江秀太郎（警視庁）、田宮流真貝忠篤（警視庁）との試合内容から現在行われている剣道の試合規則ならびに審判規則等の差異を知る手懸かりとなった。この試合は当時行われたものでは有名なものであるが、他の試合なども調査しなければ、明確な差異を述べることはできない。ただ今回の調査により滋賀県に關係した多くの剣客が、このような試合を行っていることから、当時は滋賀県の剣術の実力が、全国的にみてもかなり高く評価されていたと言えよう。

今後も剣術の試合についての歴史的資料を収集し、滋賀県の剣術の変遷を理解するとともに、滋賀県における剣道指導に役立てていきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 鈴木一郎他：「近江諸藩における武芸教育に関する研究—幕末期から明治初期における近江剣客評について—」，昭和61年度滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要No. 7, 84-92, 1986
- 2) 森川竜一：「香川善次郎伝」，香川善次郎刊行会, 38-46, 1983
- 3) 園田徳太郎：「剣士松崎浪四郎伝」，久留米図書館友の会, 222-223, 1957
- 4) 前掲書, 3), 104-114
- 5) 講談社：「昭和天覧試合」，講談社, 1930
- 6) 今村嘉雄：図説日本剣豪史，新人物往来社, 1971
- 7) 山田治郎吉：日本剣道史，水心社, 1922
- 8) 綿谷 雪他：武芸派大辞典，新人物往来社, 1969
- 9) 堀正平：大日本剣道史，剣道書刊行会, 1934
- 10) 渡辺一郎：史料・明治武道史，新人物往来社, 1971
- 11) 福島正義：剣道之光，国士館大学漢学研究室, 1971
- 12) 広谷雄太郎：日本剣道史料，上崎書店, 1943
- 13) 高木健夫：「史実二十四人の剣客」，鱒書房, 1955
- 14) 峯 房一：「一刀正伝無刀流剣道教典」，修文館, 1934
- 15) 綿谷 雪：「武芸流派100選」，秋田書店, 1981
- 16) 井上光貞：「図説歴史散歩事典」，山川出版社, 1984

## 近江諸藩における武芸教育に関する研究（その3）

### ——大溝・彦根各藩における武芸教育について——

村山 勤治（滋賀大学教育学部）

#### はじめに

筆者は、前々回において『滋賀県諸藩における武芸教育に関する研究』として、「膳所藩における武芸教育について」の報告を行った。

今回は、近江国に維新时期まで存続した8藩のうち、湖西地区にあたる大溝藩（2万石）と最も大藩である彦根藩（24万5千石）の各藩において行われた武芸諸流派をとりあげ、特に、幕末期における剣術流派の消長と前回報告した膳所藩への武芸諸流派の伝播との差異についての検討を行った。

#### 1. 大溝藩に行われた武芸諸流派と維新时期における剣術について

##### (1) 大溝藩に行われた武芸諸流派について

大溝藩の武芸諸流派を知る手がかりになる資料は横田三千太郎氏蔵『藩治職制』（資料1参照）・『分部家系譜』・『旧大溝藩学校遺事』等がある。

大溝藩藩校修身堂が、天明5年（1785）、分部左京亮光実によって設立され、『日本教育史資料第一巻』には、「武芸ハ別ニ講習所アリ本館ニ開セス因テ其詳細ハ雑記中ニ記入アリ又文学ト武術ト程度ノ比例ナシ」（445頁）とあり、武芸は藩校外の他の場所で行なわれていた。また武芸場については、前掲の『旧大溝藩学校遺事』に、「武芸場ハ修身堂外別所ニ設立ス、剣槍ノ練習ヲ練兵堂ト号ス、弓術ハ練兵堂ノ傍ニアリ、馬ハ又別所ニ調馬埒ヲ設ケ炮術トモニ藩庁内ニ在テ別ニ練習ス」とある。（資料2参照）

また、武芸諸流派について同資料によってまとめると次の通りである。

- 弓術 竹林流、道雪派「至テ少シ」
- 馬術 大坪流、高麗ハ條流
- 槍術 宝蔵院流、種田流
- 剣術 一刀流、今枝流、直心影流、北辰一刀流
- 柔術 「其好ミニヨリテ学ビシモノアリト雖モ自己ノ嗜ニシテ一般ニ習ハシメズ
- 砲術 武衛流、菅沼流、西洋流「旗下下曾根、勝房州ニ士ノ門ニ学ハシメ」
- 薙刀 月山流
- 用器 シトウ、リンカク、ウゼン「俗ニ（補具）ツクボウ、サマスタ、ヒネリ、ナド云モノナリ、此シ器ヲ使用スルノ方ヲ習ハシム」

以上の流派があげられるが、『日本教育史資料第一巻』にみられるとおり、「維新前師範ノ者ナシ藩士江戸勤藩中ニ他藩ノ教授者ニ就キ指南ヲ受ケ帰国シテ之ヲ伝播スルノミ」（447頁）という状況であったと思われる。

しかし、次に述べる剣術については『藩治職制』によれば、維新前後（年代不詳）に「助教頭」・「助教」が置かれていたと考えられる。

##### (2) 維新前後における剣術について

剣術は、古くから一刀流と今枝流の二流であったが、「近世ノ藩主分部若狭守光貞ノ中年頃ヨリ男谷総州ヲ始メ其他千葉周作等ノ門ニ入シメ古流ヲ一洗シテ専竹刀相撃ノ方ヲ学ハシム」とあり、これは、前々回報告した膳所藩における剣術流派の伝播と一致している。また剣術師範家については、「精齋ノ門第横川七郎ナルモノヲ扶持シ常ニ来リ教ヘシム後天野将曹ノ門人青柳某ナルモノ藩士ニ入ル」とあり、また『分部家系譜』には、「門

人青柳萬次郎ヲ聘シ来リテ、練兵堂ニ師範タ  
ラシム」(73頁)、そして前述の『藩治職制』  
には「剣術助教頭兼弓槍野呂京英」・「同  
青柳万次郎」・「剣術助教 三宅猪太郎 完  
戸大治郎 野呂有一郎」の五名の名前を見る  
ことができる。このように大溝藩の維新前後  
の剣術は、男谷精一郎——天野将曹——青柳  
万治郎の流れを汲む、直心影流が行われてい  
たことが推察される。しかし横川七郎につい  
ては、『藩治職制』に名を見ることができな  
いので、彼は、江戸藩邸における指導を担当  
したものと思われる。

## 2. 彦根藩に行われた武芸諸流派と 念流剣術諸流派について

### (1) 彦根藩に行われた武芸諸流派について

彦根藩では、寛政11年(1799)、第11代藩  
主井伊直中によって藩校稽古堂(のちに弘道  
館、文武館と改名)が設立され、掟に「一、  
武を講ずるの肝要は弓馬槍の芸を学び礼儀兼  
恥を基として武道専ら可致研究事」と他に二  
条目を加え、開館の主意は、武道を盛んに行  
い、孝悌忠信を基に礼儀正しくして、文武両  
道を唱えている。

稽古館設立当時に行われた武芸諸流派を  
『日本教育史資料第一巻』・『武芸流派大事  
典』・『北村文書』<sup>(注1)</sup>(彦根市立図書館  
蔵)「彦根藩武術」を参考にまとめてみると  
次の表1の通りである。

『彦根市史稿第十三巻』の荒居善明氏記録  
「享保元年冬同二年春 御家中武芸御覧出勤  
人数覚記」には、七代藩主直惟が巨下の武芸  
稽古を視察しており、それによれば、弓術は  
武田流加藤彦兵衛の門人83名、剣術は正法未  
来記念流兵法打太刀稽古、荒川八左衛門門弟  
90名、同渥美平八郎門人92名、同山根左五  
左衛門門人26名、同辻武右衛門門人58名、その  
他の武芸では、風伝流槍術304名、新心流居  
合7名、宝蔵院流鎌十文字12名などその他不  
明の流派を合わせると、4ヶ月間に760名余  
の武芸稽古を直惟が親臨し激励した記録が記

表1. 彦根藩稽古館において行われた  
武芸諸流派と師範家名一覧

|                  | 流 派                          | 彦 根 藩 関 係 師 範  |
|------------------|------------------------------|--|
| 弓                | 武 田 流                        | 加藤彦兵衛(藩主師範) 加藤彦太夫  |
|                  | 日 置 流                        | 後閑新兵衛 佐藤作蔵<br>高橋新五左衛門 増島団右衛門   |
| 術                | 片 岡 流                        | 角屋半之介  |
|                  | 心 鏡 流                        | 山根善五右衛門(藩主師範)  |
| 槍                | 風 伝 流                        | 内田室右衛門 三浦軍介<br>久保田全左衛門 奥山源太 山田源八郎  |
|                  | 宝 蔵 院 流                      | 森川翁助   |
| 剣                | 正 法 念 流<br>未 来 記 念 流 兵 法     | 荒川孫三郎(藩主師範) 渥美平八郎  |
|                  | 念 流 兵 法<br>未 来 記 念 流         | 安中半右衛門 上坂文内  |
|                  | 念 流 正 法 兵 法<br>未 来 記 念 流 兵 法 | 江坂新左衛門 久保田三郎左衛門  |
| 術                | 念 流 正 法 兵 法<br>未 来 記 念 流 兵 法 | 川手七左衛門   |
|                  | 江 武 知 明 流<br>兵 法 正 法         | 永居新五左衛門  |
|                  | 鉄 閉 団 梅 一 流                  | 園川丑太郎  |
| 居<br>合<br>柔<br>術 | 新 心 流                        | 河西庄右衛門(藩主師範)<br>横田治平 田部孫八  |
|                  | 伯 耆 流                        | 園川丑太郎  |
| 薙<br>刀           | 仙 移 流                        | 横田治平   |
|                  | 天 流                          | 富永卯兵衛  |
| 馬                | 乘 方 悪 馬<br>新 当 流             | 神尾主守 神尾惣左衛門<br>佐藤新五右衛門 羽田逸平 伊藤権平衛<br>伊藤勤兵衛 葉袋藤太 栗林新左衛門<br>白居左門 渡辺市兵衛 曾根佐十郎<br>勝野瑠蔵 |
|                  | 八 条 流                        | 白石安太郎(定府)  |
|                  | 太 子 流                        | 伊藤宗兵衛 古澤六右衛門 横尾七太夫<br>吉田清太夫 岡島久米八郎 江坂久蔵  |
| 術                | 桑 島 流                        | 桃居嘉三 松宮小八郎   |
|                  | 米 村 流                        | 稲垣彌十郎(藩主師範)  |
|                  | 一 貫 流                        | 具名筑後   |
| 砲                | 一 夢 流                        | 宇津木兵庫 上坂又三郎  |
|                  | 藤 岡 流                        | 村山丹宮   |
|                  | 柴 田 流                        | 小野久真吉  |
|                  | 太 田 流                        | 金田軍治郎 松本兵右衛門   |
|                  | 太 玄 流                        | 堤光治郎   |
|                  | 大 成 自 得 流                    | 舟越三十郎  |

されている。

このように、彦根藩は、京都に対する防備  
のほかに幕府の要職について国政に関与して  
おり、大藩としてその武芸教育は、熱心にか  
つ盛んに行われたことが理解できる。

### (2) 念流剣術諸流派と渥美平八郎について

彦根藩の念流剣術については、榎本鐘司氏の『第十七回大会発表用抄録・剣道における二重的性格の形成過程について』に、文政期以前に、「鉄仮面」<sup>コウシナヒ</sup>「剛順」を用いた流派として紹介されている。

先に掲げた表1にみられるように念流各派は、正法念流未来記兵法・念流兵法・念流兵法未来記・念流正法兵法未来記入内・江武知明兵法正法（念流の一派か）などのように表現されている。これらの各派の相異については、不明であり、今後検討せねばならないが、『彦根市史稿第六十一巻』「渥美平八郎の項」にみられる荒川念流と渥美念流（両者は「正法念流未来記兵法」に属す）の相克について述べてみたい。

渥美念流は、三代渥美平八郎の時、荒川家の正法念流が、「鉄仮面」と「剛順」に対し、「細拆順」（袋しないの様なもの）<sup>・</sup>で素面で行う一派を発明し、荒川孫三郎の許可を得て別派を立てた。しかし、八代平八郎の時、藩主直中（寛政元年～文化9年）は、「素面の撃剣は自然柔弱にして兎戯に等しかるべし、荒川流の鉄仮面を被り剛順を以て撃剣すべきを命ず」ところが平八郎が「其決して然らざる由来を上申して家流を固守す」ので直中の命により、両門より代表を出し強弱を決することになった。その結果は、渥美門下の庄勝となったが、直中は「柔弱となしえを危む、今之を見るに然らず」とするが、「若其性に依り表面を厭ふさものとときは、恐らく汝が流派の衰微を来さん、今鉄仮面一雙を興ふ、爾后素面被面兼て教授して以て失墜する勿れ」と述べたという。この八代八郎は、三百石を領し、母衣役物頭弘道館物主書物奉行の諸役に歴任して安政6年（1859）2月4日歿す享年不詳。

この相克は、試合がどちらの流派の方式により勝敗がどのように決せられたのか不明であるが、幕末期の剣術界の古流から新流への流れを考え合わせると興味深いものがある。

## おわりに

今回は、大溝・彦根藩の武芸諸流派についての調査を行った。まず、大溝藩においては、天明5年（1785）に修身堂が設立され、また武芸場を修身堂敷地外に設け練兵堂と称した。幕末の剣術は、膳所藩と同様に一刀流、今枝流などの型剣術流派から北辰一刀流、直心影流などの竹刀打込み稽古を中心とする幕末新流への転換が計られた。また、維新时期には、藩政所に文武局を置き、練兵堂教頭（正四等）、剣術助教頭（従四等）、剣術助教（正五等）と指導者の階級制度を導入している。

次に、彦根藩の剣術は、念流が中心であり、この念流は、文政期以前から荒川念流と渥美念流に分かれ、それぞれの稽古法を競っていた。藩主直中の時、二流の優劣を決する試合が行われ、素面、袋しないの渥美念流が庄勝している。

尚、調査、資料不足のため、念流各派の伝系や先述の優劣を決する試合の方法等について、明らかにすることができなかったことを反省している。今後も調査を継続し、解明する必要があると考える。

最後に今回の調査により、『琴堂文庫』<sup>(註2)</sup>（彦根市立図書館蔵）中に「剣徳流剣術」に関する資料を収集することができた。この流は、仙台藩に行われたことが知られており、このことについてもさらに調査を継続したい。

## 注および参考文献

注1 彦根市立図書館初代館長北村寿四郎が収集した江戸～大正期の文書の写本、稿本など約200件からなる。

注2 井伊直弼の孫に当る琴堂井伊直忠（1881～1947）旧蔵の和書19,811冊が、現市長井伊直愛より彦根市立図書館に寄贈されたものである。

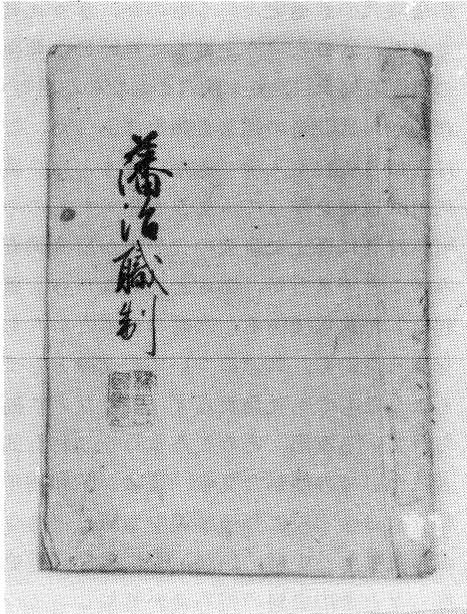
○文部省 「日本教育史資料第一巻」  
富山房 1903

○中川泉三 「彦根市史稿第十三巻・同第六十一巻」彦根市立図書館 1937

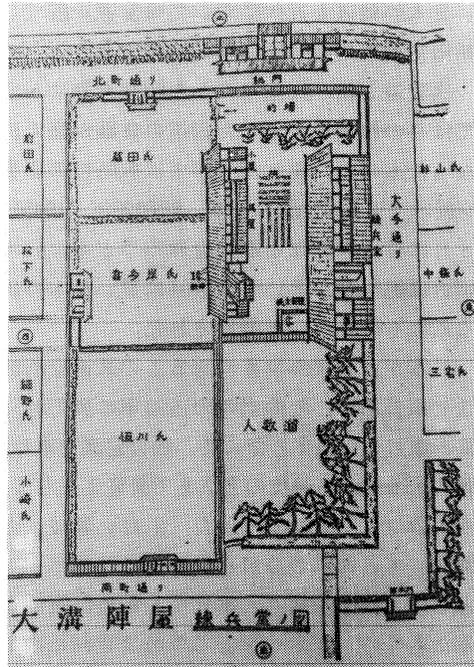
- 中村直勝 「彦根市史 中」 彦根市役所 1964
- 綿谷 雪 「武芸流派大事典」 東京コピー出版部 1978
- 児玉幸多 「藩史総覧」 新人物往来社 1979
- 滋賀県教育会 「近江人物読」 文泉堂 1917

- 高島郡教育会 「高島郡誌」 高島郡教育会 1927
- 笹井 劫 「分部家系譜」 分部神社・高島町教育委員会 1970
- 藤井貞文 「藩史事典」 和田書店 1976
- 笹間良彦 「図説日本武道事典」 柏書房 1982

資料1



資料2



## 水口藩に行われた武術諸派について

### ——中村栗園と島田虎之助の関わりについて——

鈴木 一郎 (甲賀郡剣道連盟) 土佐 三夫 (平野小学校)  
富本 一海 (甲賀郡剣道連盟) 網村 昭彦 (光華女子大学)  
西川 嘉一 (甲賀郡剣道連盟) 村山 勤治 (滋賀大学教育学部)

#### はじめに

日本の剣道も近代において幾変遷を経て、明治初期の剣道は廃刀令から脱刀令によって一次衰退した。大正年代から昭和初期にかけては心の修養を主とした剣道の修錬が盛んになったものの、それがやがては戦時色の影響を受けて実戦の剣道に至る。昭和20年(1945)8月には、如何なる形式を執ろうとも、日本剣道は絶対禁止という憂き目に遭い日本の誇る武術も終わりかと憂慮された。

日本が古来より世界に誇るこの武術を消滅させぬために、その当時の占領軍に顔の利く笹森順造先生が主となって、鳩首協議を重ね、服装・道具から競技の方法まで研究工夫して、西欧のフェンシングに似た「しない競技」と銘打って占領軍の許可を取り付け、スポーツとして、剣道を残し、案外早く剣道は復活をみたものの、スポーツとして解放された剣道はそれで良かったが、その間に大きい忘れものをしてしまった。剣道の根本理念であるところの「剣は心」という肝腎な忘れものをしてしまった。

その後40年を経過した今日、表面的に日本の剣道人口は戦前をはるかに凌ぐと言われてはいるが、これも手放しでは悦べない本来の剣道というものには未だまだ遠い。覆水も盆にはかえらずで、一旦崩れたものは容易に元の姿にかえり難いことは多くの例が示している。此処で指導者が一九丸となって、指導法を研究工夫して、叩き合いの剣道より充分な基本練習を科し、品位ある立派な剣道の再興を図らねばならない。

さて剣道の再興とともに、各地においても旧藩時代の武道史というものが、次々と刊行された。水口という土地も、当時の主要街道の東海道五十三次五十次目の宿駅の宿場町で、諸国から武芸者の往来も頻繁であった。これはという資料も入手できないまま、水口藩時代の武道史を作ってみようと思ったものの、町では既に郷土史研究の先生方が研究調査ずみのことであるが、必定と思いつながらも稿を起こした次第である。当時の武道というものを語ろうにも、武道についての文献として足るようなものも見当たらず、神社などに掲げられている奉額、そのころ水口を訪れた武芸者についての僅かな文献、筆者が昭和16年に県立水口中学校に剣道師範を奉職以来些少ながら蒐集した史料や伝説、先に県の剣道史を作ったときの史料の持ち合わせによって一応まとめた次第で、人袈裟に武道史などとはいえない難いものであることを予めお断りしておきたい。

遠く往古のことは専門史家におねがいすることとして、藩祖加藤嘉明の略歴以外は、日本剣道界に前例のない繚乱たる黄金時代が到来したという。先ず天保の終わりころから幕末(1842~1866)にかけてということである。

#### 1. 藩祖 加藤嘉明

水口藩の武道というものを語るについては、先ず順序として加藤左馬之助嘉明の生涯のあらましについて述べねばならない。

父は三河の出で今川氏から徳川氏へと二人の主人を替えた後、羽柴秀吉の家臣となる禄

高は300石であったが、一向宗の一揆に関係して尾張の地を放れた。子の嘉明は幼名を孫六といい、最初から秀吉の近習として出仕し、性は豪気であって才気は煥発にして秀吉の覚えもよく、天正11年（1582）20歳のときには、賤ヶ岳の戦いに初陣して加藤清正、福島正則らの猛将と轡をならべ賤ヶ岳の七本槍の1人として勇名を馳せた。その功を認められ天正14年には淡路の志智で1万石の大名に取り立てられ、その他にあっては専ら水軍の訓練編成に努め、秀吉の九州、小田原、朝鮮の役にはその威力を縦横に發揮して豊臣の水軍の名を高めたのである。

その後、領地を伊予（愛媛県）の正木に移されて6万3千石を与えられ、次いで慶長3年になると10万石を加増された。慶長5年の関ヶ原の戦いには西軍の文治派の石田三成と対立して東軍に加勢し、その行賞として嘉明は正木から松山に移封され20万石を与えられた。寛永4年（1672）には蒲生忠郷の後を受けて会津40万石に移封されたが、この会津への移封を、松山で大な築城計画、城下町の画期的な整備などの苛政による石高を倍にした左遷であるという史家もある。いずれにしても会津として土地は、徳川幕府にとっては東北から江戸の要衝であって、優秀な築城家で城下町の整備家でもある嘉明を、東北の押さえとして会津に配したのではなからうかとも言われている。嘉明は寛永8年（1631）9月12日、享年69歳をもって江戸屋敷において病死した<sup>1)</sup>。

藩祖嘉明—(2)明成—(3)明友—(4)明英—(5)明治—(6)嘉矩—(7)明經—(8)明熙—(9)明堯—(10)明陳—(11)明允—(12)明邦—(13)明軌—(14)明実

2代目の明成の悪政が、時の将軍家光の怒りに触れ加藤家の取り潰しを考えられたが、側近の執りなしに、寛永20年（1643）5月30日、明成の妾腹の子の明友に1万石を与えて石見の国吉身で家名を立てさせ、3代目明友の代の天和2年（1682）になると水口2万石

に加転された。4代目の明英は若年寄となり、5千石を加増されたが、正徳2年（1712）2月になると6代目の嘉矩が再び水口に入部して、第14代目の明実に至り明治維新を迎えて2万5千石を奉還した。

## 2. 儒者中村栗園と劍豪島田虎之助について

劍豪島田虎之助を語ろうとするときには必ず中村栗園の名が出てくる。栗園あっての島田で、栗園の名を落として劍豪島田を語ることはできないというのが一般史家の定説となっている。島田に栗園という郷党の先輩がいなかったら、島田も幕末三劍豪の1人として世に出ることはできなかったであろうとさえ言われている。この2人は同年代のころ豊前（大分県）中津藩の出身で、この2人の大先輩に当たる人で中津奥平藩で13万石2人扶持の下級藩士で福沢百助（福沢諭吉の父）があった。この百助という人は、その頃まれにみる新しい思想をもった人で、武士階級と町人百姓の間がらに差別ということは一切せず、勉学を志す者に対しては何かと充分世話をしやり、ともに勉学に励んだ人であった。

例えば同じ中津城下の染物屋の倅で和蔵という者が学を志していると伝え聞くと、自宅に招き勉学に協力してやり、後年には立派な漢学者となり、中村栗園と称して江州水口藩の儒者として仕えた者もあった。百助は家庭の事情が許さなかったため、藩に仕えて忍従の一生を終わったが、自分の夢を吾が子に託して大成させた。その子こそ前述の福沢諭吉である。島田は自分の個性を悟り、劍で身を立てることに希望と夢を託し、劍道を正式に習い始めたのは文政9年13歳のとき、藩の劍術指南役で戸田流の堀十郎左衛門に入門して本格的に稽古を始めた。それがもう15、6歳くらいになると、生まれつき激烈な気性で太刀筋も気性の如く激しく、藩中の若侍たちも恐れをなして太刀を合わせる者もなくなると、いささか慢心して文政12年（1829）16歳の春、

九州一円に相手を求めて武者修行の旅に出たものの、その道中の行く先、行く先で叩き伏せられ、突かれ息の根も泊まるほどの散々な目に遭った。改めて世の中の広いことを知らされ、悄然と中津城下へまい戻り、さっそく栗園の家を訪れたが、寒中の深夜にもかかわらず、ぼろぼろの着物に裸体に近い姿で、ちぎれ、ちぎれの房の下がったような袴を着けていた。栗園の家で温かい食事を与えられて、どうにか人心地ついたとき、島田が栗園に言うことに、道中で貧乏や苦勞は厭わぬが、自分が志しているところまでは、まだまだ程遠い寧ろ剣の道を断念しようかと思うと訴えた。

そこで栗園が論じて言うに、もっと志を高く持って強い相手を求めて修行を積み天下に名を成す剣士になれ『良禽は樹を択で棲むという、不知や兄、我鎮西は古來尚武の郷、南薩日隅には慈僧が自顕流あり、北して肥の二州には宮本が二天、円明の二流の聞ゆるあり、さらに北九州に至るれば……』と密かに小粒金（1分金）2個を握らせて島田を激励した。栗園のことばに勇気を得た島田は修行をやり治そうと、天保2年再び相手を求めて修行の旅に出で、その道中には博多の聖福寺に仙崖和尚の門をたたき、雲水の生活にも溶け込み参禅し、和堂の説話に耳を傾け、和尚の許しを得て聖福寺を辞去するに当たり、和堂より峴山の号を授けられて江戸に向かって修行の旅をつづけた。栗園は島田を修行の旅に送り出した後、そのころ中津藩の大阪蔵屋敷に勤めていた福沢百助の斡旋によって、江州水口藩の侍調として仕えることになった。

島田は江戸への道中、大阪蔵屋敷に大先輩の福沢百助を訪い、武者修行のため江戸へ行く素志を述べた。ところが、百助が島田に論じて言うに、剣だけを追求して如何に猛けき腕になり得ても、それを人間性の奥から確りと支える学問や禅の力がなければ、所詮空しいものになると伝えた。島田は翌日水口に栗園を訪れ、大阪での百助との話を伝えたところ、栗園が言うに「文武不岐」先ず身に教養

をつけることを論し、大阪で百助が水口へ行って栗園に相談してみよと言ったのは、島田が江戸へ出て行こうというのは、未だ少し早いと考えたからではなかったかと思われる。

この水口藩の家中には直心影流免許皆伝の剣士で井崎為輔という人がいるが、この人は滅多に門人を採らない人であったが、私しら1つ頼んでみるから、「この水口で暫く稽古を積んでからにしてはどうであろうか」と2人の相談がまとまり、井崎も中村先生の親友の方ならばと、入門を許され立ち会ってみると、島田の剣勢の鋭さに感心して指導することを引き受けた。その時井崎が島田の剣を評して栗園に、「島田氏の剣勢の鋭さは中村先生のお話の通りで、技量は充分と見たが惜しむらくは勝負の決めどころの判断が足りない。その辺の研究をしたらよかろう」と伝えた。

島田が初めて水口へ来たところの剣技について次のような記録がある。

水口で島田を指導したという井崎為輔の孫で甲賀三郎という作家（本名を井崎能為）は水口の南小路で育った人であるが、長じて東京神田三崎町の春日直哉の長女で道子と婿養子縁組をした人であり、昭和20年に東京都で没している。彼の評価について「このごろの剣豪作家たちは、島田は天性の達人であったように言っているが、島田が水口へ来たころは、ただ血気盛んな若者で、強い気性にものをいわせた叩き合いの域を脱しない暴れ者で、島田が天資を伸ばしたのはその後にある」と島田が水口で井崎に就いて2年間修行した結果驚くほどの技量になったと評している。

そこで井崎が言うに、このうちは江戸へ出て修行したがよかろう、だが江戸へ出て貴殿の学ぶ師は、直心影流の男谷精一郎か、直心影流藤川派の井上伝兵衛の他にあるまい、そのいずれかの道場を訪れたがよかろうと助言することを忘れなかった。

天保6年（1835）の春、師の井崎、親友の栗園らに激励され江戸へ旅立った。その江戸

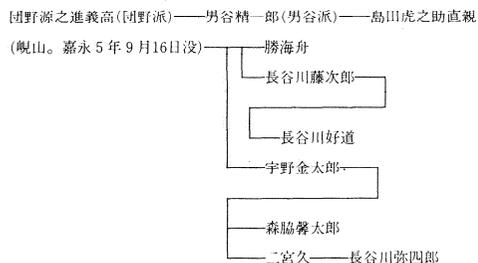


図1. 直心影流男谷派島田虎之助関係系図

への旅を東海道を通らず中仙道を木曾路にとり、飛騨高山に少年のころ郷里中津城下で剣の師であった堀十郎左衛門の師匠筋に当たる、戸田流中興の祖で左京亮正統第二代で戸田流高柳派の高柳金三郎（音無しの構えで名を為した又四郎の兄）を訪ね、ここで3ヶ月ほど指導を受けたりえ江戸へ向かった。しかし、その間の動静については明らかではない。

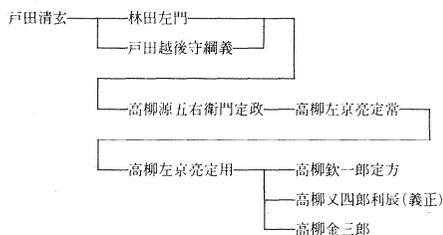


図2. 戸田流高柳派剣術高柳金三郎関係系図

島田が男谷に入門を許されたのは、子母沢寛氏の「ふところ手帖」によると、男谷入門帳に天保9年2月7日入門と自署しているという。男谷に入門後は一念発起、我を捨て修行に励み島田の天資にもよるであろうが、入門して1ヶ月後には異例の免許皆伝を許されて、男谷道場の師範代を務めるに至った。

そのころ江戸の中西道場では、音無しの構えの高柳又四郎、寺田五郎右衛門、後年には大真伝兵法の師範となった白井享義が、この三剣士を中西道場の三羽鳥と称して江戸の剣道界に羽振りを利かせていた。

その後、師の男谷に勧められて天保11年(1840)の春、他流の技をみがくべく、世に隠れた剣士を求めて未知の世界の東北路を志して修行の旅に出で、その旅先では、仙台で

戸田流林田派の藤木道満と2勝1敗、日光では東照宮警衛士の山口為之助、佐倉では立身流の逸見仲造、佐野では神道無念流の吾孫子利太郎らに連勝し、なかでも水戸では藤田東湖に会い、島田は水戸斉昭公の御前において、藩の剣術師範で北辰一刀流の小沢寅吉政方と5本勝負を行い、3本連取して大きく面目を施した。

師の男谷は島田が東北の旅先で、小沢寅吉に勝ったということ非常に喜び、島田も此のうちは道場をもったがよかろうと勧め、天保12年になると江戸浅草新堀に道場を開き、男谷から自分の甥に当たる勝麟太郎少年の教育を依頼されたが、この少年こそ明治維新の大業を1人で働かせたかの如く世に伝えられている勝海舟の少年時代であった。島田の道場では剣だけでなく禅学、漢学の講義を行い、剣は人を殺傷の具にするものでなく身を護り心を磨くもので剣の修行に心技一致を説き、故に武家の中でも評判が良く良家の子弟の門人が多かったといわれる。また島田の余りにも有名なことばをして『剣は心なり、心正しからざれば剣また正しからず、剣学ばんと欲せば先ず心を学ぶべし』がある。

このことばは中里介山の『大菩薩峠』の中に書いたことから、島田の名文句として決定的になったものである。

島田は生涯読書に親しみ、広く儒者知識を訪い知見をひろめ、津藩の斉藤拙堂、肥後の亀井昭陽、博多の禅僧仙涯などは特に交わりが深かった。島田の30余年の短い生涯を思うに、生まれつき激烈な性格を第2の人格に変革してくれたものは禅僧の仙涯、親友の中村栗園、郷党の大先輩であり大恩人の福沢百助らと交わりによるものと思われる。結局学問を愛する者の影響が島田の剣の生長を支えたものと言えよう。島田もまた自分を今日まで導いてくれたものは一つに栗園あればこそと、未知の世界の東北路を武者修行の旅をしたとき、使った小手と竹刀を報恩感謝の意をこめて栗

園に贈っている。

島田は嘉永5年(1852)9月16日、享年39歳をもって江戸に没した。墓碑銘は師の男谷精一郎信友の揮毫によるものが現存する。

はじめに島田、栗園、福沢百助ら3人の関係のあらましを述べておいたが、この3人の関係も書く人によって、例えば栗園のことにしても中津藩城下の画工の子、または藩医の子などとしている。

百助の子の論吉の書いた『福翁自伝』には「私の父は勿論漢学者で、身分は下級士族であり定めし上流士族から蔑視されていたでしょう、ところが私の父は決して他人を軽視しない。例えば江州水口の碩学中村栗園は父の実弟のように親しくしていましたが、元来栗園の身分は豊前中津の染物屋の息子で、いわゆる素町人の子だから、藩中の士族は誰も相手になるものがない、けれども父はその人物を愛して、身分の相違を問わず大層丁寧に取り扱うて、大阪の蔵屋敷に寄寓させて、なお種々周旋して、とうとう水口藩の儒者になるよう取り持ち、その間柄というものは、真の骨肉の兄弟に劣らず。父の死後、私の代りになっても、栗園先生は福沢の家を第2の実家のような塩梅にして死ぬまで交際していました。」とあり、藩医の子、画工の子でなかったことがわかる。

いずれにしても栗園という人は、ただ漢学者であったというのみでなく勤皇の志の厚い人であり、安政2年(1855)には藩主に献言して、藩校翼輪堂を建設して藩士の子弟に文武を講ずるなどの功績は大なるものがあり、また一面、時の動きを見る偉大な政治家でもあった。

幕末には鳥羽・伏見の戦いを皮きりに戊辰の内乱に突入して、討幕か佐藩かの決定を迫られた各藩では、至るところで意見の対立を生じて、戦争以前に流血を見る藩内党争を引き起こした例も多くあるが、水口藩にあっては正義党と俗論党が互いに主導権をめぐって、激しく抗争をつづけていたが、文久3年

(1863)2月29日に家老の岡田直次郎が凶刃に倒れた後、元治元年(1864)になると改革派で尊皇討幕を主張する中村栗園をはじめ城多薫、豊田美穂らの正義派が政権を握り、一挙に藩政を勤皇討幕へ統一させて明治維新を迎えた。

明治14年(1881)12月20日、享年76歳をもって天寿を全うし、水口町赤堀地先の墓地に葬られ、明治15年(1882)9月愛子の1人で滋賀県令であった籠手田安定の撰文で、

城山之麓 綾野之東 長松翠柏  
是君之宮 思而不見 唯有清風

明治書壇の巨匠で岩谷脩の揮毫にかかる中村栗園先生之墓というものが現存する。

### 3. 直心影流 井崎貞右衛門為郷

この人は歴とした水口藩士で剣は直心影流免許皆伝、体術は大垣藩伝承の体術勝身流の白井六郎太直伝の達人であった。前述の島田虎之助が江戸へ出るまで水口で、この井崎に就いて剣の指導を受けたと伝えられている。この人が天保12年(1841)に水口神社に奉納した『奉額』が絵馬堂に現存しているが、長年風雨にさらされて惜しくも文面は判読しがたいが、かろうじて大垣藩白井六郎直伝、勝身流体術正統、井崎貞右衛門為郷と判読できるものがある。

さて此の勝身流体術ということについて、数多くの武芸流派文書を調べたが、勝身流体術というものの記述は全く見当たらない。しかも大垣藩という藩は武器の開発、武術、武芸の研究工夫の盛んな藩で、他で見られない珍しい武器もあったようだが、勝身流体術というものは、柳生流剣術のなかにあったもので、幕末のころまでは確かに大垣藩に伝承保存されていた。

体術は、定義から考察すると柔術のように思われるが、旧幕時代までは武術と言えば、武士の表芸である剣術を言ったもので、互いに剣を合わせて決着のつかないときは組み討ちとなり、相手を捻じ伏せて首を掻き切るな

どして勝負をつけたもので、そういう技を総称して体術といった。

そこでまた組み討ちという術語がでてくるが、これもまた現代の剣道には全く縁の無いことであるが、明治時代は当然のこと、まだ大正年代から昭和の初めころまでは、少年たちの間でも盛んに組み討ちを行った。その方法は体当たりか、足がらみで相手を倒して捻じ伏せ、面を捻じり脱がせば1本の勝ちとなったが、それが現代のようにスポーツ化した剣道では、足がらみをかけると反則、強く踏み込んで体当たりしたかのように見えて相手を転倒させても反則というルールでは全く思いもよらないことである。

### おわりに

水口神社の絵馬堂には、馬術、弓術の2面の奉納額があり（資料1参照）、当時は他の武術とともに盛んに修練されていた。馬術では、大坪流遠乗術で、嘉永2年（1849）2月のものがある。しかし、大坪流馬術では、その流派が18派と分かれ、水口藩で修練されていた大坪流遠乗術が、どの派に属していたか解明できなかった。弓術では、正統日置流竹林派の文久2年（1862）4月のものがある。

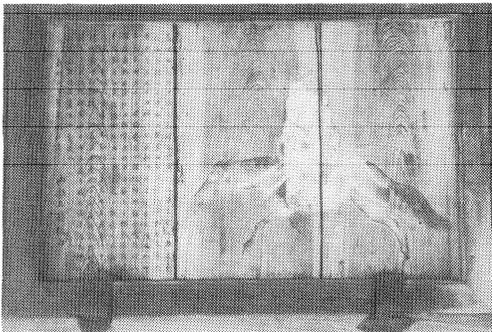
竹林派の祖は近江の石堂竹林坊如成であり、真言宗の僧として高野山にあり、そして芳野に移り、吉田家の祈願僧となり還俗して北村と称した。

水口藩の武術とくに剣術は、水口城（2万5千石）をもつことから、侵略防備に対する修練が盛んに行われており、また東海道に接する地であることから、上京あるいは帰藩途中に立ち寄る武芸修行者が多く、他流試合が頻繁に行われた。この他流試合については、次号で紹介したい。今回は、中村栗園と鳥田虎之助との関わりのみで終始し、水口藩全体の武術諸流派の検討がなされなかったことを反省している。今後も続けて資料収集、調査を行いたい。

### 参考文献

- 1) 児玉幸多, 藩史総覧, 新人物往来社, 1979
- 2) 堀正平, 大日本剣道史, 剣道書刊行会, 1934
- 3) 綿谷雪, 武芸流派大事典, 東京コピー, 1978
- 4) 笹間良彦, 図説日本武道事典, 柏書房, 1982
- 5) 滋賀県教育会, 近江人物誌, 文泉堂, 1927
- 6) 藤井貞文, 藩史事典, 和田書店, 1976

資料1



## 膳所藩における種田流槍術について

村山 勤治 (滋賀大学)  
今里 正克 (京都産業大学)

綱村 昭彦 (光華女子短期大学)  
土佐 三夫 (大津市長等公民館)

### 1. はじめに

槍術とは槍法ともいい、槍を用いて敵を制する武道である。実践に使用されるようになったのは、源平時代の戦術であった騎馬戦が、戦国時代初期にかけて徒歩戦へと移行するにつれて、大太刀や長巻に代わって、槍が重宝されるようになった。槍は刀剣に比べて安価であり、雑兵の集団にも用法の訓練が容易であるため、粗雑で即製の集団であっても、陣形を結成し槍隊として組織すれば、いわゆる槍ぶすまの強味を発揮することができた<sup>1)</sup>。

戦国時代以来、「槍は武士の表道具」といわれ、道具ということばが槍の汎称と解されるほどに重要視されるにいたった。しかし鉄砲隊の出現により、槍隊の戦力は半減した。それ以後刀術の技術向上に関しての稽古修行は継続して行われていったが、槍術に関しては、格式を重んじる上士のみが行っていただけで、下級武士の間ではあまり行われていなかった。

今回は近江諸藩に伝播された槍術の師家と諸流派についての調査を行い、とくに膳所藩において行われた種田流に関する伝書・英名録等の史料に基づき検討を加えて報告する。

### 2. 槍術の諸流派と師家について

全国に弘流した槍術の諸流派についておもなものを『武芸流派大辞典』<sup>2)</sup>を参考にして流祖名とその系統および特長などについて紹介したい。

#### (1) 種田流

肥前唐津藩士種田平馬正幸が流祖であり、大島流槍術を大島雲平高賢(草庵)および月瀬伊左衛門清信(大島流祖大島伴六の門人)

に学び、中江新八二義の中江流とその他諸流の粋をとって一流をおこした。初め江戸に住んだが、その子の市左衛門は松平備前守隆綱に仕え、この流派名は市左衛門より称した。後に、平田派・山岡派の二派に分かれた<sup>3)</sup>。

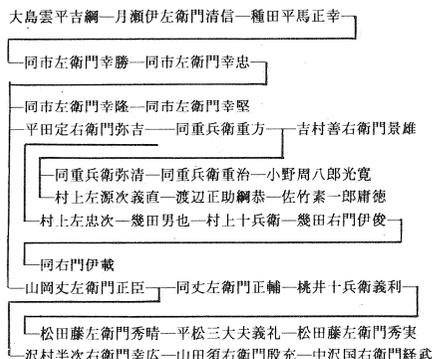


図1 種田流系図

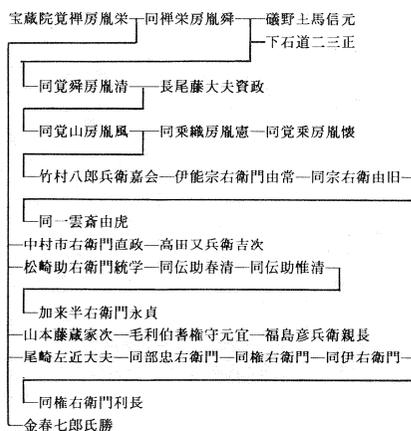


図2 宝蔵院流系図

#### (2) 宝蔵院流

奈良興福寺の寺中、宝蔵院の院主、覚禅房法印胤栄が流祖である。中御門氏の出身で、

代々興福寺の衆徒（僧兵）の家柄である。俗称は伊賀守といった。柳生但馬守宗厳とともに刀術を上泉伊勢守に学び、また大膳大夫盛忠に槍術を学んだ。柳生宗厳・穴沢盛秀・五坪兵庫らの助力を受けて、宝蔵院流槍術表九本・真位六本、あわせて十五本の式目を制定した。慶長12年（1607）8月死去し、享年63歳であった。

### (3) 宝蔵院流下石派

祖は下石平右衛門三正で旧姓は山田瀬兵衛、通称は初め道二で後に平右衛門となった。宝蔵院二世の胤舜の門人松平忠明に仕え大和郡山に住した。致任後は奥州白川へ行き後に松平直矩に仕え、五百石を有し、また浪人となって江戸へ出て、その時より下石道二を名乗った。晩年は播州赤穂で過ごした。彼は晩年に至って深く心術を究め、禅語を用いて『秋月集、筌蹄行巻』と題する十文字鎌法の伝書を著述し一派の秘伝とした。流伝は盛岡藩・熊本藩・高田藩等に伝わったが、高田藩では新宝蔵院流と称していた。

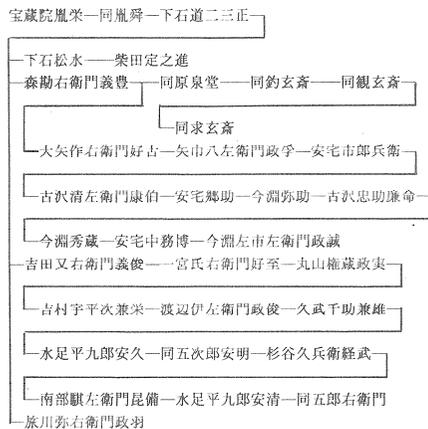


図3 宝蔵院流下石派系図

### (4) 宝蔵院流高田派

祖は高田又兵衛吉次で、通称は八兵衛または五兵衛と呼ばれ、晩年は宗白を号した。天正18年（1590）3月伊賀国白樺村に出生した。14歳で中村市右衛門尚政に宝蔵院流を学び、

さらに宝蔵院胤栄の直弟子となり、慶長20年（1615）中村市右衛門より印可を受けた。他に直槍を五坪兵庫介之政に、太刀は柳生流、薙刀は穴沢主殿に穴沢流を学び、総合して一流とした。法形百一本、剣術・軍術・心術にわたる必勝の論、巴之術十五ヵ条を発明して、宝蔵院流に加えた。巴之術は、承天禅寺碑文には、宝蔵院胤栄から伝えられた唯受一人の秘術とある。また弓術を水野意休重次に学んだ。元和9年（1623）播州明石藩小笠原家に仕え、寛永9年（1632）同家が豊前小倉に移封されるのに伴われて移った。寛永15年（1638）島原の役に槍手一隊を率いて本丸を陥れ、功によって七百石を有した。寛文5年（1665）1月死去し、享年82歳であった。

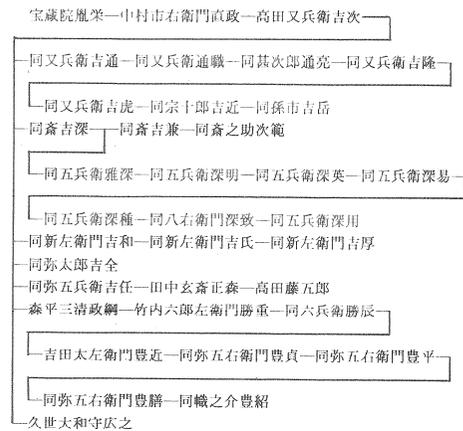


図4 宝蔵院流高田派系図

### (5) 宝蔵院流中村派

祖は中村市右衛門尚政で父は中村金次郎といい、もと福島正則の臣である。14歳から宝蔵院胤栄に学び、29歳で奥義に達した。時に慶長10年（1605）、中村市右衛門を名乗りさらに29流を研究し、明国へ渡航して国王から賞賜品を得て、慶長11年（1606）に帰朝した。寛永8年（1631）越前福井の松平忠昌に召し抱えられ、長束流剣術の祖でもあった。承応元年（1652）死去し、享年75歳。江戸定府であったため幕士の門弟が多く、福井には少な

かった。

藩での正称は宝蔵院流十文字鎌槍である。

#### (6) 法蔵院流長谷川派

祖は長谷川主税英信で慶長3年(1598)讃岐国に生まれ、大島流・宝蔵院流を修めた後、宝の字を法に改めて法蔵院流長谷川派と称した。また田宮流長谷川派居合の宗家であり、他に無双直伝流18代目宗家戸田長門流棒術・剣術の正統でもあった。紀州家に仕え、貞享4年(1687)死去し、享年89歳であった。

#### (7) 本心鏡智流

祖は江州甲賀の梅田奎之丞治忠で木川友之助正信に櫻原流を学び、工夫を加えて一流を開創した。鍵槍の諸流中この流が最も流布した。元禄7年(1694)死去し、享年69歳であった。実子の梅田九左衛門治繁が、元禄9年(1696)に薩摩藩に召し抱えられ、同藩に伝承した。治繁は元文元年(1736)2月死去し、その流系中、とくに有名だったのは秋月藩師範の吉田主水虎毅で、名は彦六郎・主礼ともいい、一翁、また澹軒と号した。天保5年(1834)7月死去し、享年71歳であった。同藩での最後の達人は間角弥で、彼は大島流槍術の師範でもあり、「間の裏はね」と称する技で有名であった。

#### (8) 本間流

祖は本間勘解由左衛門昌能で塚原卜伝に神道流ならびに新当流槍術を学び、一流を開いた。その子、次郎兵衛尉重成は後に外記と改めた。越前に住し、福井に武者修行に来た穴沢盛秀と試合をして勝っている。福井藩・中津藩に伝承した。

#### (9) 無辺無極流

祖は羽州鶴岡、酒井氏の臣の田村八右衛門秋義で、初め兄の田丸弾右衛門と試合をして敗れ、後に無想によって開悟し、山本無辺流を基本として、柄の長さ2間2尺・径2寸の大槍を用いる新流を創始した。寛文4年(1664)死去し、竹田承応寺に葬る。幕末期に丹波園部藩に永井六郎左衛門、備後福山藩に内藤権五郎・海塩又蔵、大洲藩に不破吉五

郎、膳所藩に多田輝之守保・石原富俣があった。

#### (10) 無辺流

大内無辺流ともいい、祖は大内無辺で、出羽国横手郡大内庄の人で戸倉河畔で成長し、鮭を突捕るのが業でありそれより槍術を悟った。「無辺風月眼中眼、不尺乾燈外燈、柳暗花明十万户、敲明処々有人口」の偈をもって必勝の極意を悟って流名とし、幻槍の伝を奥とした。その子の上右衛門、孫の清右衛門と伝を継いだ。上右衛門の門人の椎名靱負は羽前横手の出身で、慶長10年(1605)8月に印可を受け、寛永2年(1625)12月に死去した。

#### (11) 山本無辺流

祖は山本無辺齋宗久で通称は甚兵衛と呼ばれ、武州の浪人で出羽国山本郡に住した。無辺流祖の大内無辺の甥で叔父に学んだ。柔術は和術防木の伝といった。防木とは木製の十手である。棒術は六尺棒を用いた。

#### (12) 大島流

祖は大島伴六吉綱で天正16年(1588)に出生し、美濃の人で横江弥五右衛門の二男大島雲光義の養子である。幼年より四方に遍歴して槍術を学び、後に独創して大島流を称した。寛永11年(1634)柳生宗矩の推薦で紀州徳川家に仕え、正保3年(1646)隠居して伴六と称し、安心と号した。明暦3年(1657)に病死し、享年70歳であった。

#### (13) 建孝流(伊東流)

祖は奥州の伊東紀伊守佐忠で祐忠、紀伊入道と称した。室町末期に芦名家の臣で、槍術に志し無想により鹿島大明神と摩利支天から管槍の秘術を会得した。神道流刀槍の二術から64カ条の皆伝を得て工夫して一流を究めた。

この流の槍の長さは始めは規制がなかったが江戸初期以降、全長1丈1尺1寸、身は両鎗7寸5分、石突は鶴嘴形で3寸5分で、金属製3寸5分の輪(管)を柄にとうし、穂に近い部分に鏝があって管を止めている。伊東は管槍のほか薙刀・十文字槍も併伝した。

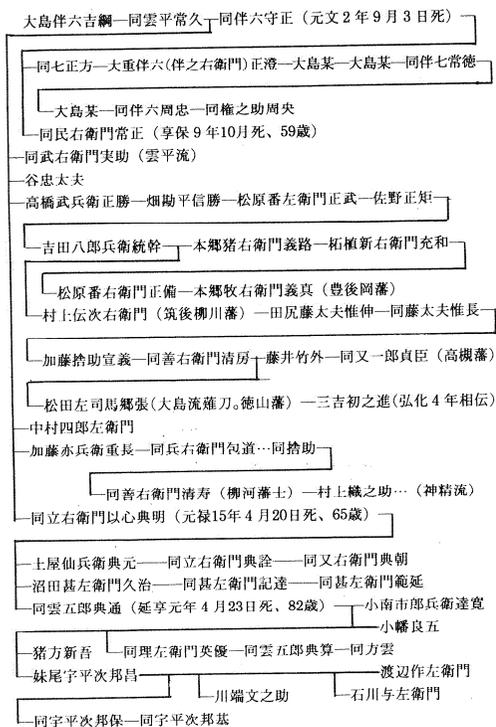


図5 大島流系図

#### (14) 伊岐遠江守流

祖は伊岐遠江守貞利で通称久左衛門といい、河野通直の裔で大和柳生谷に居住していた。柳生宗厳について刀術を修行し、宗厳の死後は宗矩に従学した。従来から直槍修行を志して10余人の師に会い蘊奥を究めた。後に9尺柄の鏝槍の一流を立てた。

#### (15) 淡路流 (木下流)

祖は木下淡路守で豊臣中納言家定の孫として慶長8年(1603)に生まれた。寛永3年(1626)に従五位下淡路守に叙任し備中足守藩二万五千石の主となった。寛文元年(1661)死去し、享年59歳であった。初め佐分利佐内重可に学び、後に独自の见解から一派を開いた。槍の穂先が短く、それを掌中に握って敵に向かう無形の構えで知られていた。流名は利当の孫の木下肥後守公定が称し、利当はまた富田流剣術を石川霜台廉勝に学んだ。一説には五の柴流を学んでから一流を開いたとも

ある<sup>4)</sup>。

#### (16) 磯野家流

祖は熊本藩士磯野馬信元で通称は伝兵衛といい、宝蔵院胤舜・胤清の門人であった。島原の役後、能役者の中村庄右衛門と同格の五百石で召し抱えられたが、同格では不満であった。そこで藩主は庄右衛門の演能の時に殺害を伝兵衛に命じたが、舞台上の庄右衛門に隙の無いのを見て謝罪した<sup>5)</sup>。

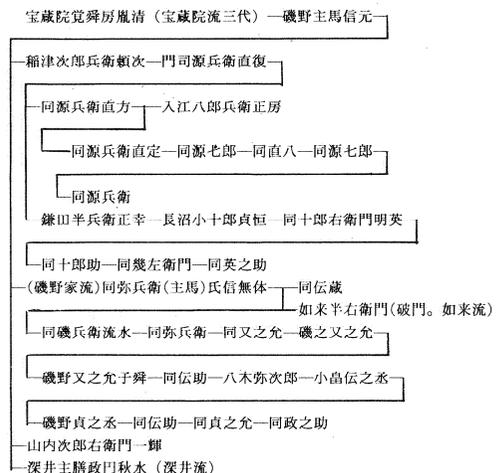


図6 磯野家流系図

#### (17) 一中流

祖は信州の東梅軒一中で梅田治忠に本心鏡智流を学び、また穴沢流・一元流輪鍵を加えて、みずから一中派本心鏡智流を称した<sup>6)</sup>。その子、丹治祇通に相伝した。

#### (18) 無残流

祖は近江宮部の小桐弥六で不窮と号した。特に水中での闘争において優れていた。享保5年(1720)に死去した。

#### (19) 神道流

正称は天真正伝香取神道流、略して香取神道流といい、祖は飯篠家直で通称は山城守後に伊賀守と改めた。号は長威斎または長威入道下総国香取郡飯篠村に出生した。同郡山崎村に移って刀槍を考究し、鹿島・香取の両神宮を祈って天真正神道流を開創した。

## 20) 船津流

祖は船津八郎兵衛で内蔵助流の渡辺内蔵助  
胤の門人である。豊臣秀頼に仕えたが、後に  
川越藩主松平伊豆守信綱に召し抱えられた。

## 21) 一指流（一旨流）

祖は松本長門守定好で一指と号した。奥州  
の出身で初め羽州最上義光に仕え、義俊の時  
に羽州山形鳥居左京亮忠政に仕え、さらに羽  
州上ノ山の土岐山城守頼行にも仕えた。慶長  
10年（1605）日下一旨流の榎野久兵衛茂俊に  
従い同14年（1609）奥秘に達した。沢庵和尚  
が上ノ山に謫せられるや通参して禅による槍  
の奥義に悟人し、一流を開いた。彼の槍術は  
俗に「槍銃」と称され、あたかも銃弾の発射  
のような見事さで有名であった。晩年雲州松  
江藩松平直政に仕え、万治3年（1660）に死  
去し、享年75歳であった。

## 22) 榎原流

祖は榎原五郎左衛門俊重で紀州藩大番の士  
で二百石を有し、寛永20年（1643）に文右衛  
門と改名した。明暦元年（1655）に死去し、  
流名は神道流または榎原流という。神道流の  
穴沢盛秀の門人で、槍は初めは直槍を用いた  
が、後に関口柔心の忠告で鍵槍に転じた<sup>7)</sup>。

## 23) 内海流

祖は内海左門重次でのちに六郎左衛門と改  
め、紹節と号した。出生地は近江国で父は古  
屋喜左衛門といい蒲生家の臣であった。内海  
左門は初め石田治部に仕えたが、関ヶ原の役  
の後に岡田庄五郎の肝煎で藤堂家に召し抱え  
られ、五百石を有し、鉄砲頭を務めた。戸田  
清玄に9尺柄の鍵槍を学んで、内海流を開い  
た。幕末期、伊賀上野藩に深井段右衛門があ  
った<sup>8)</sup>。

## 24) 佐分利流

祖は佐分利猪之助重隆で富田流槍術の富田  
牛生の門人であった。富田信高・池田輝政に  
仕え、門人佐分利源五左衛門重堅・佐分利左  
内重可らに相伝し、重堅の伝は佐分利平蔵重  
種が継いだ。

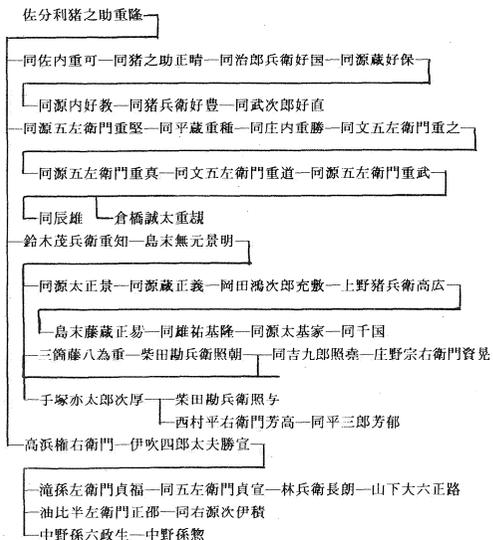


図7 佐分利流系図

## 25) 慶増流

祖は慶増安太夫直繩である。通称は庄兵衛、  
後に安太夫で近江国坂田郡長沢の人で、家祖  
は慶増大和守弘繩で一万三千石を領した。直  
繩は同国小坪村の八木兵庫頭之政に直槍を学  
び、天正年間中、唯受一人皆伝を得た。江州  
一乱の後、鳥取の宮部中務に仕え、八百石を  
有した。

## 26) 真当流

この流では槍術とはいわず、槍兵法といい、  
真当の字に書き改めたのは、工藤松軒の門人  
野村勘右衛門尉で江州五之坪の住人であった。  
その流系の佐野太兵衛は本多上野守に仕え、そ  
の門人の大井中務は九鬼長門守の家臣である。

## 3. 膳所藩資料館所蔵

### 『英名録』について

天津市御殿浜の本多神社境内には、膳所藩  
資料館があり、館長の竹内将人氏の御好意で  
多くの貴重な資料を撮影させていただくこと  
ができた。その中に種田流小野周八郎の『英  
名録』があったので、その内容について紹介  
したい。

英名録には、幕末期に武術家が武者修行で  
各地の道場において試合を行った時に、相手  
の名前を記録しておくものと、訪問修行のた

めに当地で試合をした場合にその道場主が、訪問してきた武術家の名前を書き残しておくものとの2種類がある。今回撮影できた英名録は、試合を行った場所が詳しく記されていないが、前者に属するものと考えられる。

その内容についてまとめて列挙すると次のとおりである。

表紙に『英名録』次頁に「膳藩種田流小野周八郎」とある。(資料1参照)

◎壬子九月二日試合

○新見藩種田流平田重兵衛門人  
膳所藩小野周八郎

○玉造藩佐分利流是 渡門人  
是 石之助  
他 5名

◎同 九月三日 於浪花祇邸試合

○土浦藩出間新当流鈴木周瀨門人  
○同 宝蔵院流高田派室 志津吉門人  
伊藤杢弥  
他 6名

◎同 九月十日試合

○赤穂藩種田流飯尾精之進門人  
増田貞次郎  
他 11名

◎同 九月十四日試合

○東備藩佐分利流谷彌平治門人  
谷 幾之進  
他 16名

◎同 九月二十日試合

○芸 藩新陰疋田流小谷武左衛門門人  
薬師寺新八  
他 25名

◎同 九月二十一日試合

○同 藩佐分利流島末源太門人  
今井五郎太  
他 24名

◎同 九月二十二日試合

○同 藩行覚流管槍田辺武衛門人  
寺尾金八郎  
他 18名

◎同 九月二十三日試合

○岩国藩宝蔵院流田中栄蔵門人  
目加田拓之輔  
他 12名

○同 藩一旨流朝枝善之助門人  
中井 前

◎同 九月三十日試合

○小倉藩宝蔵院流海藤駒次郎門人  
山田源左衛門  
他 22名

◎同 十月五日試合

○久留米藩自得流井上弥乃助門人  
渡瀬羊次郎  
他 71名

◎同 十月六日試合

○久留米藩宝蔵院流磯野派  
古川小平太深井得之助門人  
渡辺五郎  
他 36名

◎同 十月七日試合

○宝蔵院流高田派森兵左衛門門人  
森 巽  
他 17名

◎嘉永五壬子十月十日試合

○柳川藩大島流加藤善右衛門門人  
谷川進吾  
他 32名

◎同 十月十一日試合

○同藩宝蔵院流  
清水太郎左衛門笠司馬門人  
水原福之助  
他 11名

◎同 十月十二日試合

○同藩未来流佐野八兵衛小野三九郎門人  
浅田清八  
他 5名

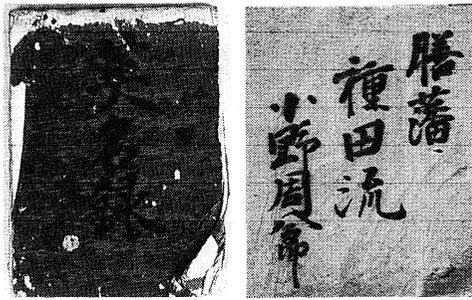
◎同 十月十三日試合

○同藩新撰流吉弘伊織之助門人  
岡田謙蔵  
他 7名  
○同藩新陰流不破十三郎益子六内門人

- 壇 七歳
- 吉田助太郎
- ◎同 十月二十日試合 他 11名
- 肥後藩宝蔵院流富田十衛門門人 他 32名  
小野熊太郎
- 同藩姉川流牟田十之助門人 他 4名  
神代市太郎
- ◎同 十月二十二日試合
- 同藩伊岐新陰流田中甚兵衛門人 他 4名  
宮川馬之助
- 同藩磯野流磯野伝助門人 他 8名  
清田九一郎
- ◎同 十月二十六日試合
- 西肥島原藩竹内流板倉八左衛門門人 他 13名  
羽田要人
- ◎同 十月二十七日試合
- 同藩宝蔵院流松平孫十郎門人 他 21名  
平井伴助
- ◎同 十月二十九日試合
- 同藩榎原改撰流奥山常右衛門門人 他 16名  
板倉多門
- ◎同 霜月朔日試合
- 諫早藩大島流藤原太三門人 他 20名  
田川良太郎
- 同藩姉川流田中権助門人 他 17名  
山口喜蔵
- ◎同 十一月七日 於獄神堂試合
- 大村藩無変流黒川正太夫門人 他 12名  
堀池源一郎
- ◎同 霜月十日試合
- 西肥廉島藩宝蔵院流西岡作右衛門門人 他 18名  
田中健輔
- ◎同 霜月十二日試合
- 西肥小林藩宝蔵院流石野左衛門門人
- ◎同 十一月十四日試合
- 島原藩宝蔵院流高田派松平藤十郎門人 他 3名  
伴内小平太
- 同藩榎原改撰流奥山常左衛門門人 他 3名  
小川三郎
- ◎同 十一月十六、十七日試合
- 肥前佐賀藩種田流中川吉左衛門門人 他 16名  
大坪寿太郎
- 同藩宝蔵院流槍術石井兵蔵門人 他 18名  
小川壮内
- 同藩姉川流槍術中村彦之丞門人 他 1名  
島内刑左衛門門人  
市川五郎
- 同藩宝蔵院流槍術□□兵□門人 他 8名  
西村八一郎
- ◎同 十一月十八日試合
- 長州萩藩宝蔵院流岡部右門門人 他 1名  
黒田清之丞
- 同藩小幡源衛門門人  
平岡庄馬
- 同藩変無流横代七郎左衛門門人  
藤井右吉

以上のように、小野周八郎は、嘉永5年壬子(1852)9月2日から同年11月18日までに大阪、兵庫、岡山、広島、山口、福岡、熊本、長崎、佐賀の各藩において、他流試合を26日間行い、対戦した人数は、583名にもおよんだ。武者修行で一日平均20名と試合を行うことは、小野周八郎の実力のみならず、気力、

体力においてもかなり優れていたことが窺える。



資料1 膳所藩資料館所蔵  
『英名録』と小野周八郎の署名

#### 4. 膳所藩資料館所蔵槍術伝書について

槍術の伝書は、その多くがすでに公開されているが、ここでは、種田流関係の伝書<sup>9)</sup>を紹介したい。

##### (1) 種田流槍術初段之伝

種田流平田派の宗家二世平田重方が作り、これを本来から授受された伝書に加えたものである。

##### (2) 槍術雌合目録

雌合とは仕合のことであり、本書は仕合勝負についての基本的な心得を問答体で述べたものである。いわゆる目録ではないが、この書を目録と記したのは、目録の位を証する伝書という意味であろう。

##### (3) 種田流免許之巻

本書の巻頭にある文章の部分が狭義における免許之巻であり、これだけを一卷の巻物にした例も多い。文意から見て、多分種田氏三世種田幸忠の原作であり、以後代々によって伝授授受の部分は書き継がれて延びていったものと思われる。

##### (4) 槍術免許添状

これは前述の免許之巻に添えた伝書である。あまり深い意味の教えはなく、種田流の槍の拵えについて記されているのが、今日からみて特に有益である。すなわち二間柄に短い三角穂の身を付け、太刀打の部分を極めて長く造り、石突は乳首形、そして全体の釣合を良

くするために石突のすぐ上方に鉛を彫り込み、その上を麻苧で巻き、漆で固めるという種田流様式の概要がわかる。

##### (5) 種田流印可伝

これは種田流平田派の最高の伝書文書である。天保5年(1834)吉村景寿から免許伝を受けた伊東次三郎計信が、更に上級を目指して関成章の門人となり、天保13年(1842)に関成章及びその師桑原伯雅からこの印可伝を得た。印可を得た伊東計信は以後槍術師範として独立し、自己の門下を養成するのであるが、その心掛けについて懇切な教訓が述べられている。

##### (6) 印可状

前述の印可伝と共に伝えられた印可の証状である。特に今後当面する門弟指南、稽古場運営の心得を記している。

##### (7) 槍術極意心事伝

槍術修行の究極としての心の問題を論じたものであり、分別にくらまされず、敵の動きを逃がさず、無我のままに即応し得る心を丁寧に述べている。

##### (8) 種田流伝授聴書并形記

免許伝の時に伝える『組合目録』所載の形について、先ず免許の形名の意味を示し、次に心覚之記として形の要領を表の槍合形から太刀合極意までにわたって述べており、種田流の建前を知り得るよい文献である。

以上の8種類の伝書のうち、膳所藩資料館において今回撮影することができたものは、伝書の内容からみて、入門者に対しての指導方法とその心構えについて述べられており、末尾には「大島雲平吉綱」を筆頭に8名の師範の名と、最後に「平田重兵衛」があり、宛名は「小野周八」と記されていることから、『種田流印可伝』とおもわれる。

## 5. おわりに

膳所藩における槍術は、種田流、宝蔵院流、宝蔵院流高田派、無辺無極流が行われていた<sup>10)</sup>が、今回の報告では、種田流をとりあげ、膳所藩資料館所蔵の『英名録』・『種

御子侍家者亦不取也  
夫不可一日無也物  
亦此之外則尚徒為  
御休之於身則在也其  
氣化後也三五為天下  
二時中用得則不亦快  
法子而後相即雖推求  
考之也亦不可置物矣  
故可無欲也無人想之  
然則身者九寸許  
來事於此作事亦難事  
善不欲者予予益矣書  
至性境有微雲觀目地  
仁德平堂有四人之等  
大宛矣此即不博勿欲  
國則他之利子杜之勝  
必視其入門之字象如

定喜事勿正勿取味者  
不惜此王人欲所故物  
取入性靈意則不能捨  
能強能知者者則能身  
勝理在去干也合自性  
物則志生亦成或到  
至五心齊家故吾誤用  
不有為之勝也既有入  
門者先氣貫則本鏡不  
能事可收神則走化門  
之能控也但事無私矣  
夫習錫之地必有餘制  
會門無會陸商地亦須  
在汝邊百他水來而  
時決雄雄則勿存後  
既交者可以切為大標  
不用自然而現白招式  
夫不可一日無物生捨  
樹云乎哉

石者依御執心  
而傳之者也努  
努不可有他見  
者也可秘之々

大島雲平  
吉細  
月相伊衛門  
清信  
種田牛馬  
子年  
種田若丸衛門  
子勝  
種田南丸衛門  
子元  
牛田定右衛門  
彌吉  
牛田重兵衛  
重方  
牛田重兵衛  
彌清  
牛田重兵衛

壽終  
月  
種田

小野周致

資料 2 膳所藩資料館所藏『種田流印可伝』

田流印可伝』を紹介した。

種田流の師範であった小野周八郎は、嘉永5年9月2日から同年11月18日までに大阪、兵庫、岡山、広島、山口、福岡、熊本、長崎、佐賀の各藩に武者修行に出かけ、他流試合を行い、583名と対戦している。試合をした場所、試合結果等については不明であるが、短期間にこれだけの人数と試合を行うことは、小野周八郎の槍術の技量のみならず、精神的にもかなり優れていたと考えられる。

膳所藩の槍術に関する伝書は、『種田流印可伝』の紹介しかできなかったが、伝書中に「右者依御執心而伝之者也努努不可有他見者也可秘々」とあり、修行錬磨を怠らず、他者には、絶対に秘密であることと記されており、幕末期に盛んに行われた種田流槍術の教えを師家の平田重兵衛から免許皆伝者である小野周八郎が受け継いでいる。このことから小野周八郎が、武者修行において活躍したことが推察できる。

今回は、膳所藩に行われた槍術の種田流関係史料をもとに調査を行ったが、当時の試合における勝敗の決め方、道具の使用、試合場の設備等について明らかにできなかった。

今後もこれらの事象について継続して探究していきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 綿谷 雪：図説・古武道史，青蛙房，279，1967.
- 2) 綿谷 雪他：武芸流派大辞典，新人物往来社，1969.
- 3) 笹間良彦：図説日本武道辞典，柏書房，453，1982.
- 4) 角田文衛他：史籍集覧第24巻：臨川書店：343，1967.
- 5) 熊本県体育協会編：肥後武道史，青潮社，1974.
- 6) 綿谷 雪：日本武芸小伝，人物往来社，414，1961.
- 7) 南紀徳川史刊行会：南紀徳川史，南紀徳川史刊行会，1930.
- 8) 日夏繁高：本朝武芸小伝，大日本武徳会，1920.
- 9) 今村嘉雄他：日本武道大系第7巻，同朋舎出版，160-200，1982.
- 10) 竹内将人：膳所藩の武道，立葵会，71，1976.
- 11) 平田 好：懐郷坐談，一成舎，1908.
- 12) 井上光貞：図説歴史散歩辞典，山川出版社，1984.
- 13) 川内鉄三郎：日本武道流祖伝，日本古武道振興会，1935.
- 14) 中神天弓：近江今昔，滋賀郷土史刊行会，1964.
- 15) 竹内将人：膳所六万石史，立葵会，1983.
- 16) 横山健堂：日本武道史，三省堂，1943.